

---

**カナデちゃんとヤミちゃんが機動戦士ガンダム S E E D で暴れるよ～！**

メア

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

カナデちゃんとヤミちゃんが機動戦士ガンダムSEEDで暴れる  
よ〜！

### 【Nコード】

N3078Z

### 【作者名】

メア

### 【あらすじ】

アンラ・マンユの暇潰しの為に殺された人々の意識が集合体となってガンダムSEEDの世界にチート貰って転生させられた。

転生させられた先は、ユージン・ヒビキが生き残ったところ………  
…つまり、キラとカガリの妹なんだ。

そして、ルナティックコーディネイターに改造されたので、世界を

滅ぼしたら、リコールくらいでした。

ヒロインはステラ、ルリ

## 世界の破壊

何処にあるのかも分からない空間に一人の声がする。

ここはどこ、ぼくはだれ？

「ここは死後の世界、お前は死者達の集合体」

死後の世界？ 学校がいいな？ 集合体って事は寄せ集めか……だから記憶がないのか。

「あれは幻想。そしてなぜに疑問形？」

なんとなく……？ それで、天国？ 地獄？ なんで死んだの？

「支離滅裂だな。まあ、我の暇潰しの為だけに殺したのだし、天国でも地獄でもないな」

そっか……ならいいや……

「あっさりしているな」

ゴスロリ少女に殺されるならほんぼうだから？

「ヒデオの変わりの暇潰し要員には良さそうだ」

褒められた！ やったね？

「さて、いい加減本題に入るが、貴方達には転生してもらうのチートもらえるならいいよ？」

「くれてやるチートは五つだ。何がいい？」

何でもいいの？

「うむ。このアンラ・マンユに不可能は無い」

なら、努力すれば何でもできる才能上限無しと知っていれば何でも召喚できる召喚魔法、召喚した対象を服従させられる能力？  
あつ、もちろん全て説明書つきでね。

「どれもアホな力じゃな。他の二つはどうする？」

後はいらないや？

「なら、こっちで適当に改造しておく。精々我を楽しませろ」

アイアイサー！

新たな生命が産声を上げた。

「あなた、可愛い女の子よ」

「うむ、この子はいいい子に育つだろう」

幸せな家庭だね！

でも、実際は……………こつち。

「あなた、何をするの!？」

「ふははは、私は実験に成功しスーパーコーディネイターを作り上げた！ 故に、私はスーパ―を超えるウルトラ……………いな！ ウルトラを超えるルナティックコーディネイターを作りあげる！」

わあゝマッドさんだゝゝ！

「やめてえっ！」

「うるさい、邪魔だ！」

銃声が聞こえて、母親らしき物が出来上がった。

「もはやブルーコスモスにも邪魔させぬ！ ふはははははははははははは！」

それから、培養槽に入れられて身体中をいじくられました。身体の中はぐちゃぐちゃ、脳は量子コンピュータが取り付けられたり、苦痛やなんやらで精神が壊れかけた。

一年が立って、動けるようになったので、血文字で召喚陣を書いて召喚を行った。

「来たれアンラ・マンユ！」

世界に穴が開き、中から闇そのもののがはい出て来た。

「何よ、いきなり呼んで……………」

「世界を滅ぼして」

「ふざけ……………あれ？」

アンラは命令に従い、世界は闇に飲まれ無に帰した。

終わり。

「てっ、終わらないわよ！」

あははは！

「で、なんでこんなことしたのよ？」

あんな世界壊れていいよ！というか、女の子だったし！

「まあ、ランダムとはいえ、あの狂気科学者凄いわね。実際、ウルトラなら成功してたかも」

で、どうすんの？

「私は結構満足したけど、暇潰しにはなってないのよね。リコールよ。能力に神の召喚、従わせるのは禁止して、弱体化の変わりになんか付けとくわね」

了解、行ってきますっ！



新たな目覚め？（前書き）

なぜか投稿できていなかったなので再投稿

## 新たな目覚め？

目覚めたら、知らない天井が眼に入ったよ。

「気が付いたか」

「おじさんだれ？」

「ウズミ・ナラ・アスハだ。そして、こっちが姉のカガリ・ユラ・アスハだ」

「……………（こく）」

アスハ家とはまた色々とまずいね。いや、好き勝手にできるからいいかな？

「お父様、もういいか？」

「そうだな、後は任せる」

お父様が去っていった。残ったのはカガリ。

「いいか、お前はカナデ・ユラ・アスハだ。そして、私の二歳年下だから、私が姉だ！」

名前がカナデか。カガリを見るに、カガリは六歳くらいだから、私

は四歳かな。

「おい、聴いているのかっ!?!」  
聴いてません。

「おねえさまあ、カナデはねむいのでとうみんます」

「おいっ、待てっ!?!」

「Z Z Z Z Z」

「もう、寝てる……………」

「カガリ様、どこですかっ!」

「くっ、もう来たか……………」「ここは逃げるしかない!」

カガリは何処が行った。これでよしと。

「とりあえず、鏡さん鏡さんどこですか」

部屋は何て言うかファンシーで、ぬいぐるみがいっぱいある。それも、4LDKが出来そうなくらいの部屋をまるまるつめつくすような数だ。その中で鏡を探すために適当に頭に受かんだフレーズを口ずさんだ。

「ここですよ」

「反応が返ってきた!?!」

天幕付きのベットの後ろから声が聴こえて来たので、そつちをみると姿見の大きな鏡があった。

「ちやお」

「ちやお」

鏡の中には、金色の蒼瞳で蒼銀色の長い髪をした天使のような美少女と同じく全身真っ黒なゴスロリ少女がいた。

「さて、なぜなにマンユが始まるよ」

ドンドンパフパフなどの効果音が聴こえた。

「アシスタントは、私アンラと私アンリでお送りいたしま〜す〜」

「同じ人物じゃない」

鏡の中で分裂したゴスロリ。

「まあまあ、気になる質問を答えるよ、貴方がAngelBeats!の世界に行きたかったみたいだから、私が貴方の容姿をAngelBeats!の天使ちゃんにしてあげました」

「わ〜〜いらない事しやがっ〜」

「.....」

「貴方は右脳と左脳にエブレインという超高性能量子コンピュータ

「が取り付けられているわ」

流したな。

「そこにAngelPlayerも入ってるし、貴方はマシンチャイルド、ニュータイプ、イノベーターでもあるから気をつけてね。原作は10年後だから、後は好きにきなさい。ステータスも開けるし便利なものもついてるしね。後、何人かサポート要員召喚しといだから、頑張ってね」

「結局、チートは何だったんだ？」

ブレインで調べてみると、錬金術が出来る事が判明した。後、身体が賢者の石だから質量無視で錬成できるよ。

「まあ、ステータスを開くこうかな」

ステータス  
技術レベル 1  
開発レベル 1  
操縦レベル 1  
戦闘レベル 1  
経営レベル 1  
肉体レベル 2  
召喚レベル 1

どうやら、強いのを召喚出来ないみたい。最初だけコストとか完全無視で良いみたいだね。戦艦と機動兵器、パイロットならなんでもよしか。まあ、最初は放置だけど。  
明日から頑張ろう。

次の日、身体は動くのでサボりにやって来た力ガリを捕まえて家庭教師の勉強と一緒に受けた。

その後、グロツキーになっっている力ガリを放置して、図書館で読書しながら、エブレインを使ってモルゲンレーテ社とプラントにハッキングをかけて技術を吸収した。それから、エブレイン二つとマシチャイルド、ルナティックコーディネイターの力をフル活用して開発と技術力の向上を行い続けた。

行動開始してから三年間がたった。

やったことは相変わらずの技術力と開発力を鍛えながら、戦闘技術を練習した。ガードスキルを天使ちゃんに操れるようになった。錬金術は金やダイヤモンドを錬成して売り払いまくって、オーブに近い無人島を買い取って、地下に秘密基地を錬成した。後は、ボゾンジャンプなどの訓練をやり続けたらCC無しで問題無く転移できるようになった。

「さて、いい加減戦力を召喚しよう。召喚するのはこの世界では異質な存在……………我が喚び声に答えよ！」

秘密基地の奥深くで召喚された機体とパイロット。

機体名：モルドレッド

形式番号 RZA-6DG

分類 ナイトオブブラウンス専用KMF  
製造 ブリタニア  
生産形態 ナイトオブシックス専用機  
全高 4.71m  
全備重量 10.23t  
推進機関 ランドスピナー  
フロートシステム  
武装 シュタルクハドロン（4連ハドロン砲）  
小型ミサイル  
特殊装備 ブレイズルミナス  
乗員人数 1人  
搭乗者 アーニヤ

モルドレッドは、アーニヤ（ナイトオブシックス）専用KMF。凄まじい砲撃性能と防御力を誇る重量級KMF。その火力とパワーによる強襲戦闘を得意としている。基本カラーは赤紫。

主武装は両肩にある二対の装甲を連結させることで構成される4連ハドロン砲・シュタルクハドロンであり、浮遊航空艦でさえも一撃で破壊してしまうほどの威力を誇る。また全身に小型ミサイルが内蔵されており、総合的な火力はケタ違いとなっている。超重装甲と機体全周をカバーするブレイズルミナスを併せ持ち、防御力も最高峰のレベルである。

機体の出力も極めて高く、KMFの頭部を片手だけで粉碎するパワーと、重量級ながらグロースターにも匹敵するほどの機動力を併せ持つ。

「ここは……………どこ?。」

彼女はアーニヤ・アールストレイム

「ナイトオブシックス」の地位に就いている少女でマントの色はピ

ンク。ピンク色の髪を頭の後ろでまとめている。幼いながらも最年少でラウンスとなった凄腕。

「ここは私の秘密基地」

「貴女が私のマスター？」

「そう。私が貴女のマスター。後、記憶は戻ってる？」

「……………戻ってる……………」

記憶が戻った事に泣いて喜ん出入るアーニヤを抱きしめて、しばらく宥めていた。

「私はマスターに従う」

「ありがとう。なら、先ずはモルドレッドを改造しよう。アーニヤは適当に基地内を見学してて」

「わかった」

アーニヤが去った後、モルドレッドをハンガーにセットして、機体を弄る。今のままじゃ、ガンダムとの大きさが四倍も違う。

「まず、動力炉を相転移エンジンに変えて、フェイスソフトデイスティションフィールドとデイスティションブラスト、装甲にPS装甲を追加、さらにブースターとGキャンセラー、腕は紅蓮参式の奴でいいや」

モルドレッドの大きさも大きくなって15Mくらいになった。当然、ミサイルの発射数を増やした。



「さて、これから楽しくなりますね」

モルドレッドの改造が終わり、次の目的を狙うことを開始した。

## アーニヤさんの魔改造

Side アーニヤ

私が召喚された時は、ブリタニア皇帝ルルーシュ君との最終決戦で、オレンジの人に殺されそうになった時、ここに連れて来られた。  
「うん……………記憶、戻ってる……………嬉しい……………」

あの人が私の身体を好き勝手に使ってたんだ。それは許せないけど、それより皆が気になる。

「……………でも……………今の私は……………マスターに従うだけ……………」

記憶の御礼もあるから、今は私の全力でマスターをサポートする。

「……………それにしても、面白い……………」

地下はドックや研究所などの施設、地上は、ブリタニアの宮殿のよ  
うな施設と遙か太古に滅んだ恐竜が沢山いる。

「……………記録……………」

「グルルルウ！」

記録を録りながら歩いていると、大きな口を開けながら迫って来る

ティラノザウルスに携帯を向けて写真撮った。

「って、何してるの!」

「がふっ!？」

私の目の前で大きく口を開けて、私を食べようとしていたティラノザウルスの頭にマスターのキックが入り、ティラノザウルスは吹き飛んで行きました。

「……………何って……………記録……………?」

「……………もういい……………地上には勝手に出ないでね。獵犬がわりにホムンクルス放ってるから」

「……………わかった……………」

……………淒く残念……………無念。

「そんなに残念がらなくても……………まあ、時間が空いたら一緒に散歩しようか」

「うん」

なら、いい。

「さて、アーニヤ、次は君の番だから行こう」

「?」

分からないので小首を傾げてみたけど、連れて行かれた。

連れて行かれた場所は研究室。

「そこに裸になって寝て。検診とか色々するから」

「分かった」

言われた通り裸になってベットに寝た。

「っ」

注射を打たれて、点滴を入れられた。

「それじゃ、お休み……………」

私は意識がだんだんと無くなって来た。

次に目覚めた時、私は培養槽の中にいた。

「……………ん……………」

「起きた？　気分はどう？」

「頭が痛い」

脳裏に色々と分らない言葉が浮かんで来る。

「アーニヤには、イブレインとマシンチャイルド+イブレインにゼロシステムを組み込んでおいたよ」

「？」

イブレインはこの脳裏にあるパソコン？

ゼロシステムとかマシンチャイルドって何？

「マシンチャイルドはIFSとの親和性を高めた存在だよ。IFSは人間の思考をコンピュータに入力できるインターフェースで主にパイロットの機体操縦に用いられる。操縦者のイメージのみで操作する事が出来、煩雑な操作を簡略化する事を可能とした代物だよ。IFSは体内にナノマシンを注入し、補助脳を形成しこれによってイメージを機体へ伝える。このナノマシン注入には不快感を伴い、またナノマシン処理中は精神が不安定になりやすく、場合によっては幻覚（幻聴）を伴うこともあるらしいけど、そっちは改良しておいた。脳にあるイブレイン………生体コンピュータがアーニヤのイメージ通りに身体や機体を動かしてくれるよ」

「なるほど………ゼロシステムはまた別？」

「ゼロシステム（Z・E・R・O・System）、正式名称「Zoning and Emotional Range Optimized System」（直訳すると「領域化及び情動域欠落化装置」）とは、分析・予測した状況の推移に応じた対処法の選択や結末を搭乗者の脳に直接伝達するシステムで、端的に言うと、勝

利するために取るべき行動をあらかじめパイロットに見せる機構だよ。

これは、コクピット内の高性能フィードバック機器によって脳内の各生体作用をスキャン後、神経伝達物質の分泌量をコントロールすることで、急加速・急旋回時の衝撃や加重などの刺激情報の伝達を緩和、あるいは欺瞞し、通常は活動できない環境下での機体制御を可能とする。更に外部カメラ、センサーによって得た情報を、パイロット自身の視聴覚情報として伝達することも可能である。このため、通常のモニター機器は補助的なものでしかなく、基本的にコンソール中央部の球状リーダーおよび周囲壁面に表示されるエネミーマーカーのみで戦闘行為を行う。

まあ、本来機体につけるものをエブレインに投入したんだ。だから機体を自分の肉体に置き換えたり、その逆もできる。簡単に言うとなら、IFS、エブレイン、ゼロシステムの組み合わせで、ほぼノータイムで自身のやりたいように機体を動かして、未来予測で確実な殲滅を可能とする」

「一騎当千？」

「多分」

「問題は、ゼロシステムに踊らせられない事、最優先はアーニヤの生存でいいからね」

「了解」

とりあえず、色々便利になったと思えばいい。

「あつ、写真とかエブレインで撮れる？」

「もちろん撮れるよ」

「嬉しい……………」

早速、写真などの記録をエブレインに移した。

それから、鈍った身体のリハビリを行った。その次に、格納庫に行き、大きくなった私の愛機モルドレッドを見た。

「胸部にグラビティブラスト発射装置、ハドロン砲はくつつけ無くても威力は出るし、拡散タイプの追加と威力の増強、遠隔操作装置などに加え、腰にビームライフルも取り付けといたから、シュミレーターで訓練しておいてね」

「分かった。マスターはどうする?」

「私はホムンクルスの実験だよ! 人が欲しいからね」

「頑張つて」

「アーニヤもね!」

去って行ったマスターを見送り、私はシュミレーターに入った。

「ゼロシステム、IFS起動……………ミッション開始……………」

それから、5時間ほど訓練して、ようやく扱えるようになった。ボソソソジャンプはまだ怖いけど、そのうち克服する。

## Side Out

アーニヤちゃん可愛いよ。あの無表情がいいね。

「さすが最年少でラウンズに入っただけはあるね。もう、モルドレツドを扱い出してる」

こっちの作業も出来たし、ホムンクルス……………自動人形でも動かせるかな。

「うん、問題無し」

とりあえず、100体ほど作って生産プラントの作成と施設の維持をやらせる。まあ、錬成した方が早いけど面倒だしね。

「電話だよ、電話だよ」

「ありがとうハロ」

自動人形の統括システムとして、サイコハロを作ったから問題ない。

「もしもし……………」

『カナデ、部屋にいないようだが……………もうすぐ時間だぞ。何処



にいるのだ?』

しまった、今日は社交界だった。

「お父様、カナデは知り合いを連れて行くので少し遅れます」

『知り合いだと?』

「はい。私の護衛をして頂く契約をしました」

『勝手な事をするなど言いたいが、お前は力ガリと違って聡い子だから責任を持つなら好きにして構わん』

「ありがとうございますお父様……………」

『うむ、出来る限り早くこい』

「はい」

ふう……………ハーモニクスを置いて置くんだったね。

「アーニヤ、帰るから一緒に行こう!」

「分かった」

アーニヤを呼んでから、研究室でハーモニクスを起動させ分身を作る。

「「ジャンケンポン、アイコデショ!」」

「勝った！」

全員がゼロを使ってジャンケンを行い、勝者が基地に残るんだ。

「オリジナルが負けた……………」

「「それじゃ、カガリの相手よろしく」」

「ふんだ……………アーニヤとイチヤイチヤするもん」

五歳の時からハーモニクスを使い、研究や開発などを同時進行で行っている。そのため、負けた奴が大変な目に会う。社交界とか面倒なんだよね。

アーニヤの手を握って基地から屋敷の近くにボソソジャンプして、部屋に戻った。

「アーニヤ、ちょっと待ってて」

「うん」

急いでメイドが来る前にドレスに着替える。アーニヤはベツトに腰掛けて足をぶらぶらさせているけど、アーニヤの格好自体はラウンズの儀礼服だからパーティーに出ても問題無い。

「お嬢様っ！」

「あつ、もう着替えてますよっ！」

「私達の仕事を取らないでください！」

だつて、着せ替え人形みたいで嫌だからね。

「その方は？」

「この子はアーニヤといって、私の護衛及び話し相手です」

「……………よろしく」

「「分かりました」」

多分、話し相手の方を信じたんだね。身長差はまだあるけど、アーニヤの方がお姉ちゃんに見える。

「こちらにどうぞ」

私はアーニヤの手を握り、魔窟へと赴いた。

パーティー会場は厳重な警備体勢が引かれていた。

「今日は厳重なんですね」

「はい、今日は財閥の方々がいらっしゃいますし、お嬢様の誕生日ですから」

「確かに今日でしたね」

「マスター、おめでとう」

「ありがとうございますアーニヤ。今日で八歳になりました」

そんな話をしていると、大きな扉のところに着いたら、大きな声と同時に扉が開いていきました。

「カナデ・ユラ・アス八様、御入場っ！」

中に入ると、私と後ろに控えているアーニヤに注目が集まり、逃げるようにお父様のところへ行きました。

しばらく挨拶などの鬱陶しい事をこなしていた。

「ねえ、アーニヤ。どうせくれるなら、ソキウスのデータや戦艦が欲しいよね」

「ソキウスは分からないけど、戦艦は欲しいね」

まあ、ボソソジャンプで転送出来るんだけどね。

「何言ってるんだカナデ？」

「お姉様、御機嫌うるわしゅうございます」

「お前、おちよくっ……………お父様が呼んでたぞ」

私に手をあげようとした瞬間に発つせられたアーニヤの殺気に飲まれたね。

「ありがとうございますお姉様。アーニヤ、行きましょう」

「イエス、ユアハインス」

さて、お姉様を放置してお父様の所に来たんですが………  
…非情に帰りたいです。

「来たかカナデ。こちらにいらっしゃるのはアズラエル財閥の方だ」

「初めまして、美しいお嬢さん。私はムルタ・アズラエルといいます。以後、御見知り起きを………」

なんでブルーコスモスの人がここにいらっしゃるんですか、殺していいですか？

ちよつと、Angel Player 起動させますね。

「………カナデ・ユラ・アスハと申します。アズラエル様」

「はい。そちらのお方は？」

「私の護衛をお願いした愛人………こほん、友人です」

「「………」」

「冗談ですよ？（多分）」

白い目で見られちゃいました。

「まあ、いい。アズラエル氏はお前を婚約者にしたいそうだ」

「あははは……………お父様、冗談が美味しいですね」

「本気だ」

「そうです。私は貴女が欲しい！」

「何を馬鹿な事を……………ブルーコスモス盟主である貴女がコーデイネイターの私をですか？」

バットエンド丸見えじゃないですか、このロリコン！

「何故それを……………」

「もう、決まった事だ」

さて、どうする？

ムルタを殺してアズラエルの材料を得る？

錬金術で事足りるし必要無い。なら、利用して捨てるか。サハク姉妹も気になるけど……………後回しでいいかな。

「分かりました。ただし、ある程度自由にさせていただきますよ」

「ええ、勿論。これでオーブと我が財団の繁栄は約束されました。これからよろしく願います」

「こちらこそ、よろしく願います」

アズラエルは私を人質とストレス解消、駒にしたいんでしょうが、私の思い通りに踊って貰いましょう。

「狐と狸の化かし合い？」

狐は九尾でしょうけどね。

## 第八研究所 1

あれから少しして、アズラエルの家に連れていかれました。  
そして、すぐに襲われそうになったので逃げて自分に似せた自動人形と入れ代わった。

「私の人形、凄い事されてるね」

「始末する?」

「始末するべき」

犯されている自動人形を見ながら、多数のハーモニクスと会議する。

「女として許せない……………」

「男の私達は平気だけど?」

「むしろしたい」

「……………」

私達の意識の元は、男6女3その他1だから、ハーモニクスの状態になるといろいろ凄い事になる。



性格には男の4はオタクだしね。

「今殺せば、歴史が変わるから駄目」

「そうだけど見てられない」

それかも話し合いは平行線を辿った。どうせ意識も無い自動人形という意見があるからね。

「なら、私達は勝手にする」

「そう、分かった」

「じゃあ……………バトルロワイヤル……………勝者に全意識が集積する事。勝負はSEED終了まででいい？」

「」「異議なし」「」

いつの間にか、オリジナルを無視して決まった。

「これは……………手段を選べない」

「召喚や錬金術は使用回数制限は一人三回まで、令呪は奪取可能とします」

令呪は召喚した対象に出る。気付かなかったけど、アーニヤのは背中にあった。

「アーニヤは私が持つてくよ？」

「「「うん」「」」

「後、世界崩壊級などは無し、秘密基地は完全中立で開始は一週間後……………」

細かいルールが決まり、ハーモニクス達は出て行った。  
これって、最強の敵は自分？

あれ？ しかもアズラエル押し付けられてないかな？  
やられた。

アズラエル家の一室。

「アズラエル様……………この二人、完全に反応無くなりましたぜ？」  
床には私とアーニヤの人形が倒れている。今までの反応だって面白  
半分でハーモニクス達がやってただけだし。

「ちつ、化け物の癖して以外に壊れるのが早かったな」

「コーディネイターなんてこんなもんでしょ」

「なら、第八研究所に送っておけ。エクステンデットのサンプルに  
なるだろう……………五体満足で殺さないようにだけ注意しておけ」

「了解」

これは都合がいいね。戦力入手のチャンスだよ。

三日後、私達の人形が輸送されるのをアーニヤと共に、上空からモルドレッドで追っている。

「目標、以前こちらに気付いていない」

私の後ろからアーニヤの声が聴こえる。これは、私がアーニヤの膝の上に座っているから。

狭いコクピット内じゃ仕方ないし、モルドレッドは意識だけでも操縦出来るから問題は無い。

「暇だから、盗聴でもしてみる？」

「うん」

アーニヤが素早くコンソールを操り、人形から音声を拾って来る。

「おい、積み荷のお嬢様はどうだ？」

「相変わらず壊れたままだ」

「そうか、俺も後で楽しませてもらうか。しかし、いいよね〜」

「何がだ？」

無事に盗聴できたみたい。

「面白い？」

「まだ、分からない」

アーニヤの質問に答えつつ、盗聴それた音に耳を傾ける。

『アンタって、今期から配属だろ？』

『ああ』

『研究員はモルモットの連中を好きに出来るんだろ？』

『確かにそうだな』

モルモットか……………やっぱり地球連合腐ってる。

「マスター」

見捨ててる時点で、人のこと言えないけど。

それに、アーニヤを改造したんだから同じ穴のムジナ。

『女なら犯りたい放題じゃねえか！ うらやましいねっ！』

『まあな。ただ、結果を出さなきゃいけないがな。しかも、処理道具として実際に使わないと駄目だし、調査が入るらしいがな』

『面倒だが問題ないんだろ？』

『おそろくな……………』

なるほど……………介入決定。ハッキングをかけて細工をする。

『まずい、燃料がマシントラブルかしらねえが、流れ出てやがる。補給しなきゃまずいな』

『大丈夫なのか？』

『ああ。近くの町に寄る』

『了解した。連絡はしておく』

チャンス。

「アーニヤ、近くの町に先回りして」

「了解……………」

モルドレッドの速度で輸送機を追い越して、町へと急ぐ。

町に着いたら、モルドレッドをボソンジャンプで基地に戻しておく。

『少し時間がかかるから、ここで休憩してきな』

『分かった』

『よし、着陸だ』

音が乱れてから、正常に戻った。どうやら、無事に着いたみたいだ

な。

『また後で』

スーツを着た男が輸送機を降りて町に出たのを飛行場の監視カメラで確認して、近づく。

「マスター、観られてる」

「え？」

周りを見ると視線が集まっている。そうだね、街中にドレスと着飾った騎士のようなコスプレをしていたら仕方ないよね。

「あそこの服屋に入ろう」

「うん」

私とアーニヤは、急いで店に入り服を購入する。

購入した服は私がTV番13話のエピローグで奏が着ていたの。アーニヤがこれまたエピローグのオレンジ畑を育てていた時の服を選びました。

「目標は？」

「大丈夫、ここから大通り600メートル先の交差点を右に曲がった先にある喫茶店に入った」

「ありがとうアーニヤ」

アーニヤがほんの少し虚空を見詰めた後、私の質問に答えてくれた。おそらく、この町に設置されている監視カメラの映像を傍受して解析したんだと思う。

「ゼロ、便利」

「確かに……………」

私達は、煉瓦が敷き詰められた中世のような町並みの中を走り、目的の喫茶店に入った。

「いらっしやうい。これは可愛らしいお客さんだ」

入った瞬間、コーヒーのいい匂いがして来た。

「ご注文は？」

「ブラック、後はマスターのオススメで」

「私はケーキ」

「はいよ」

カウンターに座って、周りを見渡す。すると、目標がない……………  
…アーニヤが何も言っていないとなると、まだ中にいる。

「ちょっと行ってくる」

「いつてらっしやうい」

私はトイレに向かう。

トイレの中には二人の気配があった。  
私は男子トイレに入る。

「ちょっ、お嬢ちゃん、ここ男子トイレだよ!？」

これはハズレ。

「中に人はいました？ 探してるんですけど……………」

「んゝ、いたよ。直ぐに出て来るだろうし、外で待ってな」

「はい、ありがとうございます」

男の人と外に出て、私は扉の前で待つ。

少しすると、水音が聴こえて来たので構える。

「ふう……………えっ？」

出て来た男を確認した瞬間、ガードスキルバージョン1で剣を作り、男の胸を突き刺しトイレの中に押し込んだ。

「がはっ……………な、何を……………」

「貴方に怨みはありません……………有りましたね。仕方ないとはいえ、あれは私の傑作の一つだったんですから」

「く……………そ……………」

「お休みなさい。良い夢を……………」



ドアに鍵を掛けて、男を奥に引きずる。

「名前はケイ・イズミ……………生体データをスキャン」

持ち物を漁り、全てを回収したら、調度スキャンが終了した。

「変化」

AngelPlayerを使つて、肉体をケイに作り変える。

「よし、問題無し」

鏡でいろいろ確認してみる。問題は服だけです。

「死体は処理して来ましょう」

ボソソジャンプで死体を基地に運び、自動人形に血を綺麗に掃除させて終わり。私は返り血なんか受けていない。

「ただいま」

「お帰り」

「できてるよ」

マスターの出してくれたコーヒーを堪能しながら、アーニヤのケーキを少しもらう。

「あゝん」

「うん、いけるね」

「うん」

一仕事を終えた感じでお茶を終えた後、男の分を含んで、多めの五倍の金額を支払いつて外にできました。

次に、服屋で男の服を買って、裏路地で変化を行い、確認する。

「問題ないよね？」

「うん、大丈夫」

「じゃあ、これからアーニヤはモルドレッドでしばらく待機をお願い」

「了解。気をつけて……………」

「うん」

私はアーニヤと別れて、輸送機に搭乗した。

第ハラボに着いたて、諸々の手続きが終了し、試験を受けさせられた。

「ケイ・イズミ君。君は素晴らしい！ ランクBの研究員の資格が与えられた。ランクBは個人の研究室とモルモットが二体与えられ

る」

「はい」

「モルモットのリストはこれだ。どれも処女、童貞だ」

表示されたリストには、番号、顔、性別、年齢、身長、体重など様々な事が書かれていた。

「この中から、好きに選んでいいんですか？」

「うむ」

私は、リストの中にあつた目的と明らかにおかしい少女を選択する。

「では、ナンバー256とナンバー868」

「了解した。ナンバー256番ステラ・ルーシェとナンバー868番ルリ・ホシノだな」

「はい」

これが神の言つてたサポートだろうな。

「研究員の健康管理のためもあるので、この二人は一ヶ月に一度確認があるから犯しておくように。精神が壊れていた方がマインドコントロールが効きやすいので、壊してもかまわんからな」

「了解しました」

「成果はホストコンピュータに送っておいてくれ」

「はい」

説明が終わったのか、研究室の鍵と地図を貰って部屋に向かった。とりあえず、ルリとステラをしつかりと育てよう。

## 第八研究所1（後書き）

やつと艦長とメインパイロット二人めです

## バトロワ

第八研究所の新任研究員ケイ・イズミになりました私は、届けられた二人を見る。

「こちらが、モルモットです。確認をお願いします」

二人の首輪に繋がった鎖を持った係員の指示に従い、受領サインをする。

「それでは、失礼します」

邪魔者が居なくなつたので、改めて二人の幼い少女をみる。歳は私と同じ、八歳くらい。金の髪と水色の髪が印象的だ。そして、両手両足に手枷と足枷が、首には首輪とリードが付けられて痛々しい姿だ。

「さてと、私は……………」

ケイも本当の名前じゃないし、本名もまずいよな……………適当でいいか……………む、あれは……………あれ着せるならそれでいいや。

「君達のご主人様だ」

「「ご主人様……………」」

二人は虚ろな表情で、マインドコントロールの刷り込みが行われたようだ。

「そう……………よし、外れた」

手枷や足枷、リードを外す。首輪は認証タグが付いているから、外したらまずい。

「次はこれに着替えて」

「うん」「はい」

二人に何故かあったメイド服を渡すと、目の前で着替えだした。少し、視線をずらしておく。

「着替えた」

「着替えました」

「じゃあ、まずは……………」

それから、私は二人の身体検査、運動など仲良くなる事を重点的に行っていった。

ここに来てから一ヶ月、予定通りステラとルリの二人は懐いてくれた。

まあ、二人に他の人がどういう扱いを受けているかなどを実際に見せて教えたから、かなり楽でした。

後、アーニヤを助手として招き入れた。当然、アーニヤの人形は処理しました。

「二人共、覚悟はいいの？」

「はい。私の身体は既に改造されていますから……………構いません」  
ルリはナデシコに乗る前、つまり、研究所にいて弄られているところを召喚されて捕まったみたい。  
ルリとしては、私に助けられた感じ……………特にアキトやユリカと会っていないしね。

「ステラ、ご主人様好きだからいい」

ステラは愛情を与えて貰えなかったからか、愛情を与えたら簡単にに堕ちました。

「それじゃ、やろうか」

「はい（うん）」

そして、二人を本格的に改造する。エブレイン、マシンチャイルド、ゼロシステムを標準装備。更にルリのエブレインは演算処理とゼロシステムにのみ特化させたら……………赤鳩みたいにできるようになった。

ステラは左右の脳にエブレインが一個ずつになった。  
これからは、ルリがオペレーター件艦長の修行、ステラはひたすら高速戦闘の格闘戦に特化させた修行を行う。  
どちらもシュミレーターでだけどね。



培養槽に入った二人を観ていると、アーニヤが報告に来た。

「マスター、ガンタンクの特許と開発報酬が出た」

この第八研究所の怖いところは兵器ならなんでもいい所だ。

「これで準備が整った」

「うん」

私はガンタンクによってAランク……………つまり、ドックが一つ貰えた。

これによって、研究所の付属施設ではなく、好きに使える私設ドックが手に入ったんです。

それから、早速ドックへ行って盗聴、盗撮などを排除して儀式を行う。

「召喚するのは二つ。材料は腐るほどあるから平気」

この第八研究所には怨念が満ち溢れているから、それをエネルギーとする。

召喚されたのはナデシコCと410m級重砲撃艦ゴルノヴァ。

「さあ、改造するよ！」

ちなみに、相転移エンジンはインフレーション理論で説明される真空の相転移を利用し、真空の空間をエネルギー準位の高い状態から、低い状態へ相転移させる事でエネルギーを取り出す。

ナデシコCは、全長298m、全高106.8m、全幅148m、総重量37,530トン、収容人員214名

410m級重砲撃艦ゴロンノヴァは、魔王の武器“烈光の剣”（これが「スレイヤーズ」の「光の剣」と同じものだとされている）にちなんで命名された。多数のビーム砲を装備し、空間を歪めての「空間レンズ」で収束して威力を高めたり、拡散させて広範囲を攻撃したりすることが可能。また、弾道が歪曲されてしまったため、リープ・レールガン以外の攻撃手段では有効打を与えることは困難。ただし、艦首の「目」付近だけは外部の様子を「見る」ために歪曲の対象外であり、ここが弱点となっている。

「この二つを融合させる。形のメインはナデシコで行く」

「うん。改造用に自動人形も呼び寄せた」

「ありがとうアーニヤ。ルリとステラが培養槽から出られるまで結構時間がかかる（中で学習している）から、出て来るまでに頑張ろう」

「うん」

それから、私達は二艦を分解、融合させていった。

ロンドンの街中を楽しそうに歩く銀髪の少女、その隣にいる男性。その少女に同じく銀髪の少女がぶつかった。

「っ!？」

「マスターっ!？」

男性と少女は驚いた。なぜなら、彼女は胸を後ろからぶつかった少女の腕から伸びた剣によって貫かれていたのだから。

「まず一人」

「カナデ、なぜだっ!？」

「坊やだからさ……………そして、貴方もいない……………」

男もあっさりと殺され、再起動したのか、周りからも次々と悲鳴があがった。

「全く、ザビ家なんて……………」

その少女の言葉は続かない。なぜなら、彼女の頭は突如飛来した弾丸により吹き飛ばされたのだから。

その現場から800メートル離れた先にあるビルの屋上。そこには、先程の少女とその殺されたもう一人の少女とそっくりな少女がいた。

「ミッションコンプリート……………これで私は勝者に近く……………」

少女……………ハーモニクスのカナデは先程使ったアンチマテリアルライフルヘカート？を肩に担いだ。

「油断大敵だよ……………私……………」

「っ！」

ヘカート？を担いだカナデは首筋から、盛大に血を何も盛大噴き出した。

そして、何も無い空間から血塗られた刃を伸ばしたカナデが現れた。

「ミラージュコロイド……………便利ですよ？」

「そうだね。髪の毛を金色にした徹底的だしね」

「早いですね……………」

屋上の給水塔に座った同じカナデが存在した。

「私も狙っていたからね」

「そう……………」

「じゃあ、はじめようか……………」

お互いにガードスキルを起動して、人間が出せる速度を超えた斬り合いが始まった。

数時間後、残ったのは金色に染めたカナデ。

「強かった……………」

カナデは身体中の至るところから血を流して、死にかけているのが一目瞭然だ。

「……………ここにいたら……………まずい……………ジャンプ……………」

彼女は生き残るため……………彼女は適当に転移した。

「あらら、大丈夫ですか？」

「……………」

「これはイケませんね……………お父様、こちらですっ！」



## バトロワ（後書き）

カナデVSカナデでした。

ザフト編？      ラクスとラウ様降臨！（前書き）

すいません、二話目の投稿が出来ていませんでした。だから、投稿  
しなおしておきました。



## ザフト編？ ラクスとラウ様降臨！

S i d e    ? ? ?

目が覚めた私の目の前には知らない天井がありました……………ここはどこ？ 確か私と同じハーモニクスと戦って勝って……………危ない所をジャンプしたはずですよ。

改めて周りを見渡すと、綺麗な花々が咲き誇る庭園でした。先程の天井は天蓋かな？

「あつ、気が付きましたか？」

ピンク色をした少女……………見覚えはないです……………この人が助けてくれたのかな？

「はい……………」

掛かっている柔らかい布団を口元まで引き寄せて、少女を見つめる。いつでも攻撃できるように……………私はまだ死ぬ気は無いですから。

「それはよかったです。もう、一週間も眼を覚まさなかったので心配いたしました」

「一週間……………」

とりあえず、安全みたいなので私のステータスを確認しましょう。

ステータス

技術レベル 6

開発レベル 7

操縦レベル 4

戦闘レベル 8

経営レベル 1

肉体レベル 7

召喚レベル 4

魔力レベル 1

召喚回数残り 14

錬金術使用回数残り 12

肉体レベルが上がっているし、魔力レベルが増えているのかな？

召喚回数は、私自身がミラージュコロイドの発生装置で1回使っているから、倒した人達の方だと思います。錬金術も同じだと思います。

「あの〜〜大丈夫ですか〜〜？」

「はい、大丈夫です。ここはどこですか？」

「ここはプラントにある私の家ですわ。あつ、申し遅れました私は、ラクス・クラインと申しますの。貴女は？」

「私は……………」

このままカナデと名乗るのはまずいです。特にオーブと関わるラク

スさんにだとかなりまずいです。

辺りを見渡すと鏡の中に一人の少女の姿がありました。

「ユーリ？」

「ユーリさんと言つのですね」

「いや、違つ……………」  
「あつ、お医者様を呼んで来ませんとっ！」  
……………  
「言っちゃいました……………」

鏡に映つたのは砕け得ぬ闇、システムU D、紫天の盟主……………  
ユーリ・エーベルヴァインでした。

『ちゃお！ 金髪だったから気分的にその姿にしといたよ。感謝してね』

この神様は……………面白ければなんでもいいのかな？

『イグザクトリイ！ あつ、ちゃんと紫天の書も用意しといたよ』  
という事はあの三人娘もいるんですね。

『あつ、ユーリ・エーベルヴァインの名前で住民登録とかしておいたから感謝してよね。あつ、面倒が無いように孤児として設定してあるからね。バイバイ……………』

その言葉を残して神様は帰って行きました。

「おいで、紫天の書……………」

呼ぶと全体が紫色で、真ん中に金色の十字があしらわれた本が現れました。

「一部を除いて内容は白紙……………あの三人は召喚でないみたいですね」

書かれていたのは私の名前ユーリ・エーベルヴァインと市民登録番号でした。

「こちらです」

「このお嬢さんですか……………」

それから、ラクスさんが連れて来たお医者さんの診察を受けました。

お医者さんの最初の診断結果は、栄養失調による気絶だったらしいので、栄養の高い点滴を入れられていたから、もう大丈夫みたいです。

「それで、お家が無いんですか？」

「はい……………両親は死んでしまっ……………」

「ごめんなさい……………」

実際、間違っていない。私達を産んだ両親は私達が殺しましたから。

「そうですわ！」

「なっ、なんですか？」

いきなり大きな声にびっくりしていました。

「貴女、私の妹になりませんか？」

「……………」

後ろ盾には丁度いいけど……………途中で反逆者になるよね……………でも、それまでにザフトで高い地位にいればいいだけだね。

「はい。よろしくお願いし……………わぶっ！」

ラクスさんに抱き着かれて、凶器に挟まれましたの。

「私、妹が欲しかったのです」

それから、私はユーリ・クラインとなり安定した生活を手に入れたの。まあ、ラクスお姉ちゃんの襲撃さえなければですけど。

お姉ちゃんの抱き着き癖はどうにかしてほしいの。死ぬほど苦しいから……………あの柔らかい肉の塊は敵です。

私がラクスお姉ちゃんの妹になってから一年、九歳になった私はお父様にプラントの技術部に連れて行って貰いました。

「これはクライン議員、どうしましたか？」

「すまんね……………娘がどうしても見学したいと一年くらい言っていてね。一応、上の許可は貰っているよ。すまんが、よろしく頼むよ」

「はあ……………わかりました……………」

「よろしくお願いします」

スカートの裾を掴みながら、頭を下げて笑顔でお願いしました。

「わっ、わかりました！ 後でサイン下さい！」

私はお姉ちゃんと違って、ネットアイドル……………ミクちゃんみたいに歌っています。

「まあ、後は任せたよ……………私は仕事があるのでね。ユーリ、迷惑を掛けないようにね」

「はい、お父様……………迷惑はかけません」

今日はお父様が技術部の上層部と会談するついでについて来ました。

「では、こちらにどうぞ」

そして、私は研究員さんに付いて行きました。

ゲストパスを頂いていった先は、何やら慌ただしく人々が働いていました。

「こちらは食料生産プラントについて研究している場所です」

「ふむふむ」

説明を聞いていると、爆発音が聞こえて来たの。

「何事だっ！」

「MSの動力炉開発部で爆発です！ 空いている人は手を貸してあげて！」

ジンかな？

「すみません、お嬢様……………安全が確認出来るまでこちらに座ってお待ちください。ここなら警備員もいますから」

「わかりました。このパソコンで遊んでもいいですか？」

「お好きにどうぞ！」

研究員さんは去って行ったので、私はパソコンの前に座ってゲストIDログインしました。

「これは食料生産プラントの設計シュミレーションですね」

起動した画面に有ったアイコンをクリックして起動させたのはシュミレーションでした。

「んと、ここを弄って……………こちらはプログラムを書き換えて…

……」

OSから構造、部品まで作り替えて……時間を忘れて作り上げました。

「うん、これで完成かな？ 生産数は四倍、生産速度も三倍増えるし……評価はS……やった」

「ほう、素晴らしい出来だ」

「え？」

慌てて後ろを振り返ると、仮面を付けた金髪の人がありました……  
…カッコイイです………この人はまさかのあの人ではないですか？

「すまない、驚かしてしまったようだね。私はラウル・クルーゼという者だ。見ての通りザフトの人間だ」

今はザフト成立から一年ですから、この人は20歳ですね。私とは11歳です。

「ラウ様、私はユーリ・クラインと申します。よろしく願います」

「よろしく。実は君の父上、クライン議員から君の護衛と案内を頼まれてね。クライン議員はどうやら、お仕事が長引くようですね」

時計を見ると、素手に二時間が経過していました。

「わかりました。よろしく願います」



立ち上がろうとしたら、手を差し出されたので、手を取って、立ち上がらせて貰いました。

「行く前にこのデータを提出してもいいかね？」

「はい、どうぞ」

「では、提出者ユーリ・クライン……………送信……………では、行くかお姫様」

「はい」

あれ？

何かまずい気もしますが気にしないでいいよね？  
うん、気の性気の性。

ラウ様に案内されながら、色々な所を回りました。

「これであらかた回ったが……………どうするね？」

「ラウ様、モバイルスーツが見たいです」

「ラウ様は止めて欲しいのだが……………まあ、私のパスでは君を通せ無いんだ」

ラウ様には敬語を止めていただきました。

「そうですか……………でも、私のパスは何処でも入れますよ？」

「ちょっと確認させてくれ……………」

「どうぞ……………」

「……………あの親バカは……………」

ボソッと呟いた言葉に、ラウ様の気持ちが籠っています。

「どうやら問題無いようだね。では、行こうかお姫様」

「はい」

連れて行って貰った場所にはジンが三機ありました。

ジン

型式番号： ZGMF - 1017

所属：ザフト

全高： 21.43m

武装：

MMI - M8A3 76mm重突撃機銃

MA - M3 重斬刀

M69 バルルス改特火重粒子砲

M68 キャットウス500mm無反動砲

M66 キヤニス短距離誘導弾発射筒×2

M68 パルデユス3連装短距離誘導弾発

射筒×2

スナイパーライフル

紫天の書のページにこんなのが浮き出て来ました。

「おっきいです……………」

「あちらには新型があるな」

そちらにはシグーばい骨組みがありました。

「ん〜」

「どうした？」

「ジンにしても、シグーにしても性能が低いですね」

ガンダムを見ているとそう思いますよね。ザクより下なんですから。

「新型機を低いと言われてもな……………」

「あれ？ 子供の戯れ事と思わない……………？」

「あのシュミレーションを見せられたら、お姫様をただの子供とは思わないね」

「なら、賭けをしませんか？」

「何を賭けるんだ？」

「お互い、勝った方の言う事をなんでも聴くという事。勝負はモビルスーツのシュミレーションです」

「いいだろう。だが、ハンデはあげよう」

「でしたら、私は自分の機体を使いますね」

「あるのか……………まあ、いい」

それから、シュミレーションルームに移動して、私はジンの代わりに今の姿にある意味ピッタリな機体を紫天の書からロードしました。

シュミレーションに入って、シートベルトを無理矢理締めて……………問題がありました。

「手足が届かないっ!？」

『どうした?』

「すみません、ちょっと待っててください」

『わかった』

私は首筋からエブレインのコードを引き抜いて、シュミレーションシステムに突き刺して、キーボードを取り出してOSを書き換えました。

作業時間は10分くらいです。

「お待たせ……………しました……………」

『いや、構わないよ。ステージは宇宙にしておいた』

「はい。お手柔らかにお願いします」

『フフ、それはわからないな』

ラウ様が消えて、発射シークエンスに入りました。

「こう言う時は……………ユーリ・クライン……………出ます！」

私は初めてのMS戦に挑みました。相手はラウ・ル・クルーゼ様………相手に取って不足はありません。

S i d e O u t

ザフト編？ ラクスとラウ様降臨！（後書き）

タイトルの闇ちゃんは砕け得ぬ闇の闇ちゃんでした。

## ザフト編？ クルーズとの戦い

S i d e   ラウ・ル・クルーズ

私はモビルスーツの訓練データを渡す為に技術部に来ていたのだが、行きなり現れたクライン議員に、娘の護衛と案内を頼まれた。面倒だと思ったが、今の私では逆らう事も出来んし、訓練所に戻っても暇なだけだから仕方なく受ける事にした。

「と言う事なので、戻るのが遅くなります」

『了解〜ところで、クライン議員の娘さんってどっち？   歌姫ラクスちゃん？   それとも超レアな碎け得ぬ闇ちゃん？』

「後ろのは名前ですか？」

『ネット場で歌ってるラクスちゃんの妹、ちびっこ歌姫ユーリちゃんの手ドルネームね』

どうでもいいな。歌など私には必要無い。

「ユーリと聞きました」

『マジでっ！？   今すぐそっちに行くわっ！』

『ダメだっ！？ おまえは仕事があるだろうがあっ！？』

『んな事より闇ちゃんに決まってるでしょうがっ！』

『それは同意だが、誰も開けられねえんだよっ！？』

『くっ……………クルーゼ、命令よ！ 闇ちゃんの写真を撮って、それにサインを貰って来なさいっ！』

『あつ、俺の分もな。貰って来なかったら一ヶ月……………いや、三ヶ月食事抜きに罰掃除な。じゃ、よろしくっ！』

教官共……………大丈夫なのか？  
病院を紹介した方が良くかも知れん。

それから、私は彼女のいる場所に向かったのだが、そこに居た少女は異質だった。

彼女の手は霞む程の速度でキーボードを打ち込み、食料生産プラントのシミュレーションデータを作り上げて行く。

その内容を後から覗き見ると、設計思想が根本から違う上に、表示されている生産量と速度は以上な値を示していた。

「やった……………評価はS……………」

「ほう、素晴らしい出来だ」

私の声に驚いて振り返った少女に自己紹介して、案内を開始した。先程の事もあり、私は彼女に興味が出て来た。



案内するにつれ、軍事機密を子供に見せるクライン議員の親バカっぷりに切れかけたが、お姫様のご要望通りに案内してあげた。

しかし、このお姫様は私に様を付けるんだ？  
何度言っても止めてくれない。

「ジンにしてもシグーにしても、やっぱり性能が低いですね」

「最新型を低いと言われてもな……………」

お姫様は驚いた顔をして、私に何故子供の戯れ事と思わないのか聞いてきたが、あのシュミレーションを見れば、ただの子供のはずが無いのは誰でもわかるだろう。

そんな話をする、お姫様は賭けを申し込んできた。私もサイン付きの写真を手に入れる為に丁度いいと思って賭けを受けた。

そして、今……………シュミレーションの中で表示された敵を見て、私は楽しくなってきた。

「これはまさに異質。モビルスーツの枠を超えているぞお姫様っ！」

私の目の前に映し出されたその姿は、地球の島国日本の真紅の『鬼面』を想起させる機体で、両肩に鬼面のようなパーツが浮遊し、まるで禍々しい鎧をまとった太古の存在であるサムライのような外見をしている。唯一の携行武器として腰には刀のような形状をした物を装備している。

『ラウ様、行きます！』

「来たまえっ！」

その瞬間、私は自身の勘に従って急速離脱を行った。

私が先程まで居た場所には、深紅の機体と振り下ろされた刀が存在した。

「速さは段違いだな！」

MMI-M8A3 76mm重突撃機銃を放つが、鬼面のような物が盾となって防いだ。

「まずいつ！」

急降下を行い、鬼面の口から放たれた深紅の光はジンの片腕を容易く溶かして、消滅させた。

「勝ち目が無いか？ いや、まだM68 キャットウス500mm 無反動砲がある！」

これは本来戦艦相手に使う物だが、お姫様の機体は真正銘の化け物だ。これでもたらんだろうな。

「全力で接近するっ！」

パルデウス3連装短距離誘導弾発を放って、おそらく、自動防御であろう鬼面にガードさせて、キャットウス500mm無反動砲を鬼面の至近距離から全弾放つ。

爆発と閃光が支配する中、私は更に急降下と急旋回を行い、背後に

回りながらカードリッジを交換し、背後からキャットウス500mm無反動砲を放つ。

「これでどうだっ！」

『させませんっ！？』

お姫様は、振り向き様に超高速で刀を振り、500mm無反動弾を全て切り裂いてみせた。そのため、私は重斬刀を引き抜いて突っ込んだが、お姫様の刀に容易く重斬刀を切られた。

「だが、まだまだ！ まだ終わらんよっ！」

急上昇して、重斬刀とジンの下半身が持っていかけたが、接近する事が出来た。

「喰らえっ！」

少し残った重斬刀を、深紅の機体の頭に突き刺してダメージを与えた瞬間に、ジンは爆発した。

シュミレーションから出た私は、先程の戦いを思い出す。確かにお姫様の言う通り、ジンなどでは相手にならない。最初の一撃以外、動いてすらいらないのだからな。

「お疲れ様でした。私の勝ちですね」

「そうだな。それで、お姫様の願いは何かな？」

あのような機体を出されても、私の負けには代わりは無い。

「それじゃあ、ラウ様……………私の物になってください！」

顔を真っ赤にして爆弾発言をしてきた少女を見る。

「君と私は歳も離れているし、今日会ったばかりなんだが？ 君は賢いから、自分が何を言っているかも理解できるだろう？」

「はい。一目惚れという奴です？」

「いや、聞かれてもこまるんだが……………」

「私の物になってくれたら、ラウ様の老化を止めてみせます」

「何故、知っている……………」

お姫様の発言により、私は殺気を持って対応する。

「それは私がラウ様と似たような存在ですから。私はスーパーコーディネーターの次の作品、ルナティックの分身体……………いわばコピーやクローンのような存在です」

成る程、奴の関係者か。

「能力は分裂する前までなら、完全にオリジナルと一緒にです。そして、私達は誰が主導権を握るか戦っています」

「成る程、私を戦力にしたいのか」

「はい。もちろん、ラウ様が好きと言う事もあります。ラウ様にとっても、悪い取引では無いと思いますよ？ ラウ様の病を治すだけじゃなく、更に強力な力……………スーパーコーディネーターを超える力を渡せます」

「フハハハハ！」

「ラウ様？」

「いいだろうお姫様。私は君の騎士となろう。ただし、まずは質問だ。私のオリジナル……………奴は生きているのか？」

「私達が殺しました」

ならば何の問題も無いな。

「では、私の病を治してくれば構わない」

「わかりました。準備がありますので、明後日にでも私の家に来て下さい」

「了解した。あつ、頼まれ事があってね。お姫様の写真とサインを二個くれないか？」

「ちょっと待ってくださいね……………」

簡単に貰えたな。

しかし、これからお姫様の様な存在と戦えるのは楽しみだな。

「はい、どうぞ。あつ、携帯を貸してください」

「何に使うのかね？」

私から携帯を受け取ると、私の腕に抱き着きながらジャンプして頬をにキスした瞬間、シャッターが押された。

「何をするのかね？」

「これでよし……………はい、どうぞ」

返された携帯の待ち受けは、先程の写真になっており、ロックまでかけられていた。

「電話番号も登録しておきましたので、よろしく願いしますね」

お姫様は、そう言って走り去った。その先にはクライン議員が見えた。

「これから大変だな。しかし、もし老化が止まるなら、レイの分も頼むでしょう……………」

そして、私は訓練所へと戻った。

S i d e O u t



## ザフト編？ クルーゼとの戦い（後書き）

はい、クルーゼさんが簡単に負けすぎかも知れませんが、機体性能とパイロット能力を考えるとどうしようもありません。

脳内にゼロシステムがあるのに、ここまでの性能差……………勝てるはずありません。

ちなみに、ステータスの最大は9までです。

ラウやキラの覚醒は操縦8とかそんなレベルです。



## ザフト編？ 魔改造と今更な説明

S i d e   ユーリ

帰ってきた私はネットに鎖の少女を流して、家族三人でご飯を食べて寝ました。色々な準備は明日です。

次の日、お姉ちゃんの抱きまくらから抜け出して、秘密基地の使用申請を行いました。

次に、お庭で精神統一を行い、魔力強化を行います。これは、既に日課となっています。

なぜなら、私の機体……………ペルゼイン・リヒカイトは通常の機体エネルギーだけじゃなく、魔力を糧に動くようになっていました。おそらく、霊力も魔力に置き換わってるでしょう。

「ユーリ……朝食ができましたわよ……」

「はい」

私の左右に浮いている魄翼を解除して、紫天の書とエブレインによって魔力負荷をかけてお姉ちゃんの所に向かいました。何度かこけたけど。

朝食は普通にサラダとトースト、スープです。

「はむはむ」

「ユーリ、零してますわよ〜」

お姉ちゃんに口元を拭かれて、恥ずかしいです。この身体になってからちゃんとご飯が食べられません。

「はい、あ〜ん」

「あ〜ん」

結局、いつもお姉ちゃんに食べさせられます。

「今日は一緒にお買い物ですから、楽しみです」

「うん、楽しみ」

今日は前々から約束していた買い物の日です。

「そうだな〜よし、お父さんがお小遣いをあげよう」

「ありがとうございます」「ありがとうございます」

渡されたのはブラックカード……………お小遣いってレベルじゃないよね……………お父様は親バカ。

私もラクスお姉ちゃんも変装して買い物に出かけました。

「あっ、いました。アスラン、こっちですわ!」

「おはようラクス。そっちの子がラクスが言っていたユーリちゃんか?」

「そうですね。ユーリ、こちらは私の婚約者のアスランです。今日は荷物持ちを頼みました」

「ご苦労様です」

自己紹介を終えた後、三人でお買い物です。

「ここに入りましょう」

「うん」

「僕はここで待ってるから」

「ダメですよアスラン」

「ちよっ……………」

お姉ちゃんが入った店は、高級な女性服専門店です。

「これなんかどうですか?」

「いつ、いいんじゃないかな?」

何度もこのやり取りが繰り返されています。

「なら、これにしましょう。次は、本命のユーリです」

「え？」

気付いた時にはラクスお姉ちゃんに腕を捕まれて、大量に用意された子供服がありました。

「まさかさっきのは……………私の油断を誘う為に？」

「だって、ユーリったらいつも逃げるんですもの」

「アスランさん助けっ「すまん……………」ふええん〜」

試着室に連れ込まれて、着せ替え人形にされました。  
結局、買ったのは数着……………というか、なぜかあったゲームの白い方の衣装です。どうせ、アンリです。

着せ替え人形にされた次の日、つまりラウ様との約束の日なのですが……………お父様とザラ議員に捕まりました。

「この提出データはユーリの名前になっているけど、本当にユーリが作ったのかい？」

「何を言っている。IDや監視カメラの映像からもこの少女がアレを作ったのは間違いない」

「あゝ確かにこの生産プラントは私が作りましたよ?」

ラウ様が提出した奴ですね。止めるのを忘れていました。

「しかし……………信じられん……………あのユーリが……………」

「クラインは無視していい。さて、今日ここに来た理由だが、このプラントを作る事が昨日の議会で可決された。そのため、君には現場監督と技術開発を頼みたい」

これはチャンスですね。色々条件を付けるべきです。

「条件付きならいいですよ」

「ふむ……………内容次第だな。出来る限りの事はしよう」

「まずは、私をザフトに入れて、提督クラス権限を与え、あらゆる行動の自由と一部隊を好きに動かせるようにしてください」

「いきなりそれが……………」

「次にモビルスーツの開発及び武装の開発……………こちらは、私の自由にさせ、その技術をザフトに公開させないこと」

「おい」

「大丈夫です。ジン以上の機体を作って量産させてあげます」

渡すのはザクですけどね。

「後は、私の部隊を持つ事と独自に私の部隊に組み込める任命権です  
ね」

「さすがにそれだけの権限は不可能だな……………」

「こちらを差し上げても……………ですか？」

「これは……………」

ザクのデータとアルテミスの傘のデータを見せて上げた。

「素晴らしい……………」

「このまま食料プラントを作ったとしても、理事国は例え核を使用  
しようと破壊しに来ると思います」

「そんなはずは……………」

「彼等の中には私達コーディネイターを人と思っていない連中が  
います。人でない存在に気にするはず無いです……………」

「そうだな……………どちらにしろ、これは保険になる。議会に掛け  
合ってみよう」

「まあ、後方に居てくれるならいいか……………ユーリの人気も高  
い……………」

「あつ、ザフトではユーリ・エーベルヴァインとしてくださいね」

「ごめんなさい、思いつきり前線に出ます。」

「了解した。それでは、仕事に戻るぞクライン」

「わかった。それじゃ、またね」

「はい。よろしく願いしますねお父様」

「うむ、任せてくれ。ユーリの為にがんばるぞ」

お父様達を見送った後、次の来客が来ました。

「お邪魔するよ」

「いらっしやいませラウ様」

「先程、議員にお会いしたが……………食料プラントのことかね？」

「はい。交換条件で色々飲んでいただきました」

「そうか。それで、どうするんだね？」

「こうするのです……………ジャンプ」

ラウ様に抱き着いて、ボソンジャンプで基地へと転移しました。

着いたのは使用申請しておいた研究所です。

「これは素晴らしいな……………」

「とりあえず、老化など治しましょう。こちらの服に着替えて、培養槽の中をお願いします」

「了解した」

ラウ様が培養槽に入ったら、液体を注入して、身体データを呼び出して行う事を書いて行く。

「マシンチャイルド化とイブレイン……強化人間はいらないですね」

「マシンチャイルドとイブレインについて教えてくれないかね？」

「マシンチャイルドはIFS強化体質を人為的に作り出した存在の事です。IFSは思考によって機械を操作するシステムです」

「成る程」

「I・ブレインは、Informational・Brain（『情報を扱う脳』）の略であり、『情報の海』に干渉し、『情報の海』を書き換える生体量子コンピュータ。情報の海と言うのは解りやすく言う这世界そのものです。そして、その力を使う存在を魔法士といいます。」

魔法士とは、脳内に「I・ブレイン」という生物学的に生成された生体量子コンピュータを保有し、上記の情報制御理論（世界を書き換える力）を用いて情報の海に干渉し「魔法」を行使出来る者を指します。

たしか、正式名称はウィッテン・ザイン型情報制御能力者でしたね。特徴としては、常人をはるかに上回る身体能力を発揮したり、炎や氷の矢を投げつける、物質が生き物のように動き回り襲いかかるな



ど、能力は多種多様である。主に「騎士」「人形使い」「炎使い」の3種に分かれ、生産もこの3種が多いですが、これ以外にも「規格外」と呼ばれる特殊な能力を持った魔法士もいます」

「詳しい情報をありがとう。後は頼むよ」

多分、MS戦では騎士最強かもしれませんが。パッシブで赤い水星ができますしね。

「では、お休みなさいませ…………… ラウ様にプレゼントを用意しておきますね」

眠ったラウ様を自動人形達に任せて、私はプラントに戻りました。

ラウ様が眠ってから二日後、プラント最高評議会に呼び出されました。

「では、賛成多数で本件は可決された」

ザラ議員に大量のモナカをプレゼントした事が効いたのかも知れませんが、私の要望は全て通り、ザフトの訓練所はジンからザクへと訓練が移行しました。

そして、ラウ様が眠ってから一週間…………… ユニウスセブンは着々と要塞化が進んでいます。完成は原作通り、C・E・69年……………  
… 今から三年後です。

ミラージュコロイドと動力路を召喚して取り付けましたから、伸びびました。でも、きっと大丈夫です。

「さて、ラウ様の機体を作りましょう。やっぱり、プロヴィデンス

……キラ君とか涙目？ やっぱり、ラウ様は仮面ですから、あれにしましょう」

ザクを生産ラインに乗せるのと、ラウ様の機体を作りましょう。後一週間で出て来るでしょうから。

S i d e O u t

## ザフト編？ プレゼンター（前書き）

明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願いします。

## ザフト編？ プレゼント

ユリSide

「ラウ様が目覚めたので、私は国費で作ってくれたラボにご案内いたしました。」

「さて、お姫様からのプレゼントは何かな？」

「これです」

「ほう……………これは素晴らしいな」

「ラウ様の前にあるの深紅の機体。」

「私がラウ様の為に用意したのは総帥専用機。」

型式番号：MSN-04

全高：25.6m

頭頂高：23.0m

本体重量：30.5t

全備重量：71.2t

出力：3,960kW

推力：133,000kg

センサー有効半径：22,600m

推進機関姿勢制御：バーニア×28

装甲材質：ガンダリウム合金、PS装甲

兵装

拡散メガ粒子砲

ビーム・ショット・ライフル

ビームトマホーク

ビーム・サーベル×2

シールド

ミサイル×3

ファンネル×6

フィールド

デイストーションフィールド

ボソンジャンプ

「機体名はなんだね？」

「サザビーです。ちなみに、コクピットは頭部にあり、緊急時には機体から分離させる事が可能です。更にコクピットブロックには小型スラスタも内蔵されており、戦線を早急に離脱する事が出来るようになっていきます」

本来とは違う点は、動力路に相転移エンジンが追加されている事（両方小型化）、サイコフレームにチューリップクリスタルとIFS端末が混ざっている事です。当然、ファンネルにもIFS端末が組み込まれているので、思考による操作が可能です。

「見たことが無い武装が多いな」

「そつちも説明するね。まずは、ビーム・ショット・ライフル……これはサザビーの主兵装です。本体下部に散弾銃のようなグリ

ツプを備えています。約14メートルと、MSの全高に匹敵する大型の武装で、この時代の携行用ビーム火器としては破格の10・2MWの出力を持っています」

「待て、今現在では携帯用ビーム兵器は存在しないはずでは？」

「いえ、研究自体はされていたので、私や私達が完成させました。だから、私の機体ペルゼイン・リヒカイトも撃ったじゃないですか……………」

どうせ、皆さんもモルドレッドがある時点で自重しないはずです。

「（あれはビームでは無い気がするが……………）そうか、続きを頼む」

「はい。このビーム・ショット・ライフルは2つの銃口を持っており、それぞれ通常の収束ビームと拡散ビーム弾を選択発射出来ます。拡散ビームは広範囲を攻撃する事が可能で、接近戦時に有効だと思っています」

「便利だな」

全くその通りです。さすが、赤い彗星の専用機です。

「次にビーム・サーベルです。これはグリップに伸縮機構を採用された標準的なビーム・サーベルですね。アイドリング・リミッター機能に対応しており、デバイスや出力等は一般のMSに装備されているものと変わりません。ただ、デイストーションフィールドを纏う事も出来ず。収納場所は左右の前腕内側に各1本ずつ収納されているため、素早く接近戦に対応する事が可能です。」

そして、もうひとつのビーム・トマホーク……これは、近距離専用の接近戦用兵装です。ビーム・トマホークもしくは大型ビーム・サーベルとして使用出来ますが、本体のみでもヒートホークとして機能します。ビーム・サーベルよりも威力が高く、マニピュレーターで保持して使用する他に投擲武器として用いる事も可能ですね。大型ビーム・サーベルとしては広範囲に刃が形成される為に使い勝手に秀でていて、通常はこの形態で利用される事が多いと思います。未使用時は柄を縮めた状態でシールド裏面に搭載され、スカート・アーマーに装備する事も可能です。標準的な機構であるアイドリング・リミッター機能を備えています」

普通のビームサーベルは保険ですね。

「シールドは裏面にビーム・トマホークとマイクロミサイル3基を装備し、表面にはザフトの紋章が施されています。あと、他のザフトのMSが携行するシールド程の兵器架台化はされていませんよ。装甲に使用されている物と同等のガンダリウム系合金とPS装甲が素材として用いられているうえに、様々なコーティングが施されています。腕部への固定箇所を中心にシールド本体の回転・スライドが可能です。これによって腕の動きを著しく制約する事を防ぎ、防御面を有効に活用する事ができます。」

そして、強力な兵器である腹部に内蔵された拡散メガ粒子砲。ジェネレーター（相転移エンジンなど）に直結しており、そこから生み出される莫大なエネルギーを利用する為威力は高く、本機の火器の中では最大の火力を持っています。ビームが拡散するため攻撃範囲も広いので、一撃で複数のMSを撃破したり、デブリなどの岩盤を粉々に粉砕する事も可能ですが、ジェネレーター直結式である為パワーダウン時は威力が大幅に低下するので気をつけてくださいね。砲口の左右からは胴体に沿うようにエネルギー供給用ケーブルが伸びているので、被弾しないようにお願いします」

吹き飛んじやうかも知れませんしね。

「ああ、気をつけよう」

「最後にトリッキーな兵器、ファンネルです。これは、背面の2つのファンネルコンテナに3基ずつ、合計6基を格納しています。ビーム砲の威力の高さや稼働時間の長さからも結構安定しています」

「思考による操作か……………難しいが慣れればいいか」

「お願いしますね」

「ああ、この素晴らしい機体に見合う力を手に入れて見せよう。ただ、一つお願いがある」

「なんですか？」

「なんでも聞いちゃいますよ？」

「機体のカラーリングを銀色にしてくれ」

「……………分かりました」

「すまん。どうも、嫌な予感しかせんのでな」

「はい……………」

カラーリングを銀色に変更して終了ですね。



「あつ、訓練所に行きましょう。私もザフトに入ったので、頑張つて訓練しなくちゃいけないんです」

「では、お姫様のエスコートは私がしよう」

「はい」

私はラウ様と一緒に初めての学校へと向かいました。

ザフト訓練所はプラントの外れにある一区画を丸々使っています。そのため、かなり巨大な施設となっています。

当然、セキュリティもある程度しっかりして………ないみたいですよ。だって、その道のプロなら侵入出来そうです………コロニーの五人なら簡単に。

「ここが教官室だ」

「はい」

まずは教官さんに会いに行かないといけないよね。

「失礼します」

中に入ると、女性がこちらを見て固まりました。

「ゆ、ユーリ・クラインだっ!?!」

「本物だっ!」

男性もいました。

「違います。ユーリ・エーベルヴァインです」

「「ダウト!」「」

「残念、掛金は親の総取りです」

「マジで?」

「はい」

正解はわかりますよね?

「おかしいな、書類ではユーリ・クラインはユーリ・エーベルヴァインとして登録すると書いてあるんだが?」

「そうね」

「正解は旧姓なので、嘘では無くどちらも私です」

「「反則だ」「」

ばれてるみたいなので、ばらしちゃいました。

「教官、仕事をしてください」

「ラウじゃん、一応話しは聞いてたから、アンタの部屋はちゃんとあるよ」

「そつちでは無く、お姫様の入隊に関してです」

「そつちは問題ねえぞ。評議会の決定だから、最優先で揃えてある」

「だから、後は手続きだけね。はい、これ」

女性から渡されたのは契約書でした。ただ、私のは色々特別ですけどね。

「あと、赤い服が白い服で、ザフトの紋章が付いている物を持ってたら、とりあえずならなんでもいいっていつてたわよ」

「なら、このままでいいですね」

今の格好は白いバージョンの服ですから。

「んじゃ、お姫様の案内と身体検査と行くか。ラウも来い」

「了解しました」

「よろしくお願いします」

それから、施設内の案内と私の身体能力などを計りに行きました。

今は検査が終わり、MSのシュミレーターに向かっています。

「しかし、とんでもねえスペックだな……………」

「ええ、正にコーディネイターのお姫様ですね」

「能力判定が全てA A以上を超えてやがる。だが、問題は操縦技能だな」

「どうやら、私の潜在能力は歴代最強らしいです。でも、現在ならいっばいいますよね。」

「ナチュラルの糞共を撃ち殺してやったぜっ！」

「俺達コーディネイターにかかればナチュラルなんて雑魚だ雑魚。ギャハハハハ！」

話している間にシュミレータールームに着いたみたいです。

「すまん……どうも、ナチュラル軽視の傾向が蔓延していてな……  
……どうにかしないといけないんだがな……」

「教官、私の知り合いのナチュラルを呼んで、鍛えてもらいましょうか？」

「ナチュラルか………そいつは強いかな？」

「はい。たった一人でこの訓練所を制圧できるくらいには強いです」

「ほう………そいつはコーディネイターの味方になってくれるかな？」

「コーディネイター、ナチュラルなどの差別はしませんが、私の個

人的な味方だと思ってください」

「なら、頼む。ぶっちゃけ教官不足なんだよ。ラウみたいに全員が優秀ならいいんだけどな」

「私は優秀では無いと思います。優秀ならレイがそうでしょう」

「まあ、アイツもそうだな。とにかく、不足して休みすら無いんで使える人材がいるならなんでもいいから頼む」

「では、直ぐに連れてきます」

「おう」

それから私達はシュミレータールームに入って、そこにいた人達をボコボコにして、操縦技能を見てもらいました。私の技能は一般兵よりは上で、エリートよりは下でした。

その後も色々案内してもらい、与えられた豪華な部屋で眠りにつけました。

**ザフト編？ プレゼント（後書き）**

サザビーの名前を変えるか悩み中です

## ザフト編？ 喚ばれた二人（前書き）

ヒイロ達にするか悩みましたが、この二人にしました。

## ザフト編？ 喚ばれた二人

朝起きたら見慣れない天井が写りました。どうやら、寮にある私の部屋のようです。

部屋は4LDKでとても広く、家具は高価なインテリアで揃えられていて、とても訓練生が住む部屋ではありません。

「朝ごはん……………」

冷蔵庫からカロリーメイトを取り出してカリカリと頂いた後、エブレインを駆使して盗聴機やカメラなどを排除します。

「26個……………何時もよりは少ないけど……………ここにマジックミラーが仕掛けられているね」

マジックミラーはカーテンを取り付けて塞いでしまいます。

「これで準備完了だけど、先にシャワーを浴びよう」

風呂場も広いのでいい感じ。

身体を綺麗に洗ったら、着替えて一室に向かい、紫天の書を片手に持ち、パイロットと機体のセット召喚を二回行いました。

「ここはどこだ？」

「私達は火消しの風として働いていたはずだが……………」



長い銀色の髪をしたカツコイイ男性（仮面無し）と黒い髪のキリッとした女性が現れました。

紫天の書には白いトールラスとトールギス？が保存されました。

「すみません、私が貴方達を喚びました」

「ふむ……………召喚か」

「頭の中に直接知識が流れ込んで来ますね」

追加説明をして、お二人には納得して頂きました。

「なるほど、君が私達のマスターとなる訳か」

「そうです。構いませんか？」

「私は問題無い」

「教官の仕事は久しぶりなのだが、ゼクスと一緒にならむしろ楽しみなので引き受けよう」

「ありがとうございます。こっちに機体データを用意してあります」

リビングに案内して、携帯端末を渡して確認してもらいます。

「ザクか」

「ザクですね」

スパロボから召喚したかいがあったのか、直ぐに把握してくれました。

「コーヒーですがどうぞ……………」

「ありがとうございます」

「頂きます……………これは……………」

「まずいな」

「あうっ」

ゼクスさんにダメ出しされました。

「ゼクス……………」

「これは豆がいいのにかなり勿体無いな。それに、早く直した方がいい……………ノイン、頼む」

「そうですね。ユーリ、私と一緒に入れましょう」

「はい」

キッチンへと案内したんですが、ノインさんは難しい顔しました。はい、かなり散らかっています。

「そういえばユーリはお嬢様でしたね。生活能力ゼロな訳ですか……………」

「ごめんなさい……………」

何時も使用人がやってくれるから、やった事が無いのです。転生前の記憶なんて、もう無いにひとしいですから。

「責めてはいませんか、安心してください。何、私が今日からスパルタで教えてあげます」

「ひっ！」

恐いっ！ 何故か凄く恐いです！

「まずはコーヒーからですね」

いつの間にか、キッチンは綺麗に片付いています。

「始めはドリッパーにフィルターをセットし基準量の粉を入れて、軽く揺すって表面をならし、軽く押さえます。

次にお湯は沸かしたてを使用してください。沸騰後1分位待つと抽出の適温になります。

そして、粉の中心に、湯を細く置くような気持ちでゆっくりと注ぎます。深煎りほどゆっくりと細くお願いします。

ポイントは、縁には絶対に注がない事、一度に大量の湯を注ぐと、粉が湯に浮いてしまい旨みの抽出を嫌ってしまい、雑味の多い味になります。先程のユーリの失敗はこれでもあります」

知りませんでした。

「粉が湯を吸収して中心部から次第に膨らんでいきます。全体の60%位に湯がまわる程度を目安に注ぎ、30秒位は注ぎ足さずよくな

じませることで、コーヒーの組織が拡がり湯を受け入れる準備ができます。この時、まだサーバーにコーヒーが落ちないようにしてくださいね。

次に中心から外に向かい、のの字を描くように、細くゆつくりと注ぐのです。ムース状に盛り上がった状態を保ち、平らになる前に次の湯を注ぎます。

コーヒーが落ち始めたら、縁にかからないように周辺にもゆつくりと注ぎます。のの字をやや大きくするといいいですね。

およそ3投目、約45秒位でサーバーにピタピタと、ゆつくり落ちてくるのが理想です。

サーバーにコーヒーが落ち始め、しばらくするとフィルターが下の方からジワジワと均等に滲みてくるといい感じですよ。中心からクリーミーな泡がドンドンと出てきますよ。この通りですよ」

「確かに泡がたくさんですよ」

ここのポイントは、お湯の角度を垂直に、粉の状態をよく観察し、イメージを大切にしてください」

「はい」

「予定の抽出量に達したら、すぐにドリッパーを降ろします。

ポイントは粉がくぼむ前に必ず降ろす事です。雑味が落ちる前に終了しましょう……………これで完成ですよ」

美味しそうな香りがします。

「まだまだ奥深いですが、頑張って覚えましょうね」

「はい」

「では、ゼクスの所に戻りましょう」

「んしょ……………」

「（なんだかゼクスとの子供を育てている感じになりますね。やっぱり、私も欲しいです）」

私達はリビングに戻り、美味しいコーヒーを飲みました。そして、食事の件でまた怒られました。

それから、二人を教官室に案内しました。

「その二人が昨日言っていたナチュラルの知り合いか？」

「そうです」

教官室には昨日案内してくれた男の人がいました。

「私はゼクス・マーキスだ。こちらが私のパートナーのルクレツィア・ノイン」

「ルクレツィア・ノインです。ノインとお呼びください」

「俺はイズミだ。もう一人、フェリカと言う奴がいる。俺達がこの訓練所を取り纏めているから、俺達以外は覚えなくてもいいぞ」

「はい」「了解した」

私はあまりいないから良いと思うけど、二人はどうするんだろう？

「部屋はどうする？」

「それなんです、ユーリの生活能力が問題なので私達はユーリの部屋に住みたいと思います」

「わかった。確かにお姫様に一人暮らしは無理だろうな」

「食事がカロリーメイトやサプリメントとだけなのは驚いたな」

作れないし、太るし面倒なんですよ……………仕事（？）もありますしね。

「ねえわ……………身体壊すぞ？」

「大丈夫です……………多分……………きつと？」

「あゝノインさん、頼むわ」

「はい、任せてください」

酷いです……………身体の不調なんて無理矢理……………あれ、ユーリ・エーベルヴァインの身体なら、食事とか必要無いんじゃないですか？ エグザミアもあるし……………怖くなったので止めます。

さて、お二人には私の世話とザフトの意識改革を期待しましょう。



## ナデシコNと侵入者

S i d e    カナデ

元の姿でドックに籠って一年、ようやくナデシコNノワールが完成しました。

ナデシコNノワール

分類：重砲撃制圧艦

艦級：ナデシコ級

所属：なし

建造：カナデ・ユラ・アスハ

全長：350m

推進機関：相転移エンジン六基、反物質エンジン二基

システム

ワンマンオペレーションシステム

生体エネルギー変換システム

I F S

ボソンジャンプ制御ユニット

重力制御システム

ナノマシン生成システム

オモイカネ

ディストーションフィールド発生装置



ミラージュコロイド発生装置  
自己再生システム

## 武装

デイストーションブラスト  
ゴルンノヴァ x 500

## 装甲

ガンダニウム装甲  
PS装甲  
オリハルコン装甲

形はナデシコを大きくして、装甲を真つ黒にただけです。  
ゴルンノヴァ発射時には装甲版が多数開いてビームを発射します。  
MS発進ゲートは左右の前と後ろに有りますが、発進はボソソジャ  
ンプによる転移になります。

防御はデイストーションフィールドと重力場歪曲による攻撃誘導と  
PS装甲による物理攻撃無効などです。

攻撃はデイストーションブラストとゴルンノヴァの重力場による拡  
散と収束の攻撃と、ルリちゃんのハッキングによる全域制圧ですね。  
整備などは自己再生システムとナノマシンにより艦載機の自動修復  
などもありますから、本当にルリちゃん一人でいけます。

どう考えてもアクセラレータの極悪戦艦です。

「私に扱えるでしょうか……………」

メイド服のルリちゃんが不安それにしています。

「ルリちゃんなら大丈夫。オモイカネや私達もいるから」

「そうですね……………」

「それに、失敗してもダメージなんて入らないだろうし、ハッキングがばれても私達には誰も追いつけません」

アーニヤにわざわざ火星まで跳んで貰って、制御ユニットを持ち帰ってもらったのですから。

「分かりました。頑張ってみます」

「じゃあ、早速だけど、中に入って何時でも発進できるように動作確認とかしておいてください」

「はい」

ルリちゃんがナデシコンに乗り込んで行ったので、私は最終チェックに入ります。

『マスター』

脳裏に無表情だけど慌てているみたいなアーニヤの顔が写し出されました。

「どうしたの？」

『上の第八ラボに侵入者』

「確かにここは第八ラボの地下にあるけど、セキュリティは桁違いだよ？」

『侵入者はこの三人』

アーニヤの顔の横に、茶髪 of 長髪をおさげにした全身真っ黒な少年と黒い髪と緑の瞳をした少年、フードで顔を隠した子供の姿が現れました。明らかに盗撮のアングルですけど気にしません。

「これは……………デュオ・マクスウェルにガロード・ランですか……………確かにまずいです……………いえ、チャンスです。アーニヤは監視を続けてください」

私は召喚回数も錬金術回数も使い切っていますから、そろそろ攻勢に回ろうと思っていた所です。

『了解』

「ルリちゃん、聞こえる？」

『はい』

「ナデシコは問題無い？」

『全システムオールグリーンです』

なら、大丈夫かな。

「今から第八ラボの回りを徹底的に調べて、MSを見付けて」

『了解です』

MSを先に確保すれば問題無いよね。

「こんな事もあるつかと、用意しておいた迎撃システムの出番」

椅子に座ってコンソールに接続する。

「行け、ソードブレイカー」

迎撃システムとして用意したのはアッシュセイヴァーの武装です。形はフィンファンネルと同じだけど性能はこっちの方が上です。だってファンネルなのにB武器ですからね……………狩りの始まり。

S i d e O u t

S i d e     ガロード

俺はティファとのデート中にいきなり召喚された上に、俺を送り返せないから、自力でティファの召喚ポイント分を稼がないと二度とティファには会えないと脅して来やがったので、改造されても仕方なく従っている。

「ちつ、観られてやがる……………ガロード、油断すんじゃないぞ」

「ああ」

こいつはデュオ。俺と同じく召喚された奴で、これまた同じく同棲している女性がいるそうだ。

デュオと俺は召喚されたせい、この少女には逆らえない。そのため、こいつはかなり人使いが荒い。

『次の角を右に曲がって、三番目の部屋に対象はいます』

「わかった。フェルトはそのまま監視を続けている」

『はい』

通信をして来たのはフェルト・グレイスって言う可愛い女の子だ。確か14歳と聞いた。この子はアイツの玩具にされそうな所を何度か助けたおかげで、俺達の仲は良好だ。

「ここか……………ガロード、頼む」

「おう、任せろ！」

針がねでちよいちよいとイジクルと鍵が開いた。俺は素早く中に入り込み、銃を背後を向いている人影に突き付けた。

「動くなよ……………」

「そっちに向くくらいはいいですか？」

「ああ」

俺は振り向いた女の子の姿に我が眼を疑った。

女の子の身体はボロボロで、性器などが人目で壊されているの見える。

「なんなんだよこれっ！」

「どうしたガロード……………こいつはひでえな」

俺はジャケットを脱いで、女の子に掛けてあげた。

「優しいですね……………」

「いや……………見ちまって悪かったな……………」

「いえ……………」

「何をしている」

アイツが遅れて入って来た。

「お久しぶり」

「そうだな……………待て、その身体は……………しまったっ！」

「もう、遅い」

「「え？」」

女の子が指を鳴らすと、ドアが閉まって隔壁まで降りてきた。

「くそっ、アズラエルに差し出した人形かつ！　まだ処分して無か

ったのかオリジナルめ！」

アイツが女の子に向かって銃を発砲するが、女の子は普通に言葉を続けている。

「影武者としては最適だと思うけど、どうかな？」

「おいおい、嬢ちゃんの身体は機械だぜ……………」

撃たれた場所に穴が空いていて、そこから身体の中が見えた。

『ガロード、デュオ、急いで戻って……………ううん、絶対帰って来ない……………』

「何があつたんだ！」

「フェルト、応答しろ！」

「オリジナル、貴様の仕業か……………」

その言葉に俺達は首だけになった女の子を見る。

「簡単な事、貴方達の機体が必ず近くにあるとふんだ私は周辺を調べさせて、アーニヤに襲わせて機体とオペレーター……………フェルトさんを確保しただけ」

「無事なんだな？」

「うん」

「よかった」

俺とデュオは心の底からそう思った。

「ちっ、役立たずめ」

「なんだと!」

アイツの言い草に、俺はアイツを殴ろうとしたが、デュオが止めに入った。

「よせて、どうせ無駄なんだから。それより、脱出方法を考えようぜ」

「くそっ……………」

「脱出なんてさせませんよ」

女の子の首がそう言うと、ダクトが内側からビームのような物で破壊され、部屋の中に何かが侵入して来た。

「ソードブレイカーか……………」

「さて、さようならのお時間が来たみたい。最後にデュオ・マクスウェル、ガロード・ランの両名には選択肢をあげる。このまま自由になるか、私に従うか……………好きな方を選んで」

「フェルトはどうなるんだ?」

俺の答えはデュオの質問の解答しだいだな。



「フェルトは私に従う。それがフェルトが私に提示した条件だから」

「なら、俺はアンタに従う。ここでフェルトを見捨てたら、ティファに顔向けできないしな」

これが俺の答えだ。

「確かにそうだな。いいぜ、俺もアンタに従ってやる。どうせ、今までと変わらないからな」

デュオも同じ答えみたいだ。

「貴様等……………」

「わかった。それじゃ、さようなら私」

「ふん、ハーモニクスを使う時精々気をつけるんだな」

その言葉を最後に、アイツはビームに撃ち抜かれた。それと同時に部屋の中に転移して来たアイツと全く同じ姿の女の子が現れた。

「いいネブレイド……………回数も余ってるし、当たり前……………」

アイツが光りの粒となって、食べられるように女の子の体内へと消えた。

「痛っ」

「大丈夫か？」

「うん、令呪が私に入って来ただけだから」

デュオの心配も杞憂みたいだ。

「それにしても、御人形も壊れちゃったからここも潮時かな……  
…うん、デュオ、ガロード」

「なんだ？」「ああ」

「お二人にお仕事だよ。この施設を明朝までに完全に破壊して欲しいの。地下施設もだけどできる？」

「ガンダムさえ有れば………サテライトキャノンで終わりだけど  
………」

この世界にドームってあんのか？

「ドームは………召喚出来るのかな？ 試してみよう………ち  
よっと思つてきま………「待ってくれ」？」

本当にわかつて無いみたいだな。

「宇宙にそのまま行く気か？」

「あっ………」

「ドジっ娘か？ そもそも、ラボの動力炉を暴走させればどうとでもなるって」

確かにデュオの言う通りだ。

「なら、お願いしますね」

「おう」

「まっ、やってやるよ」

そして、俺とデュオは女の子……………カナデが始めた研究者狩りを手伝って、モルモットにされていた子供達を救出した。どうやら、カナデが薬を提供していたみたいで、そこまで酷い事にはなっていないかったので安心した。

S i d e O u t

## ナデシコNと侵入者（後書き）

ガロードとデュオなどはうる覚えなので崩れていても勘弁してください。

機体はヘルとDXです。デュオとガロードはエンディング後からしばらく立ってからです。

デュオはエンドレスワルツより。  
フェルトは1st前になります。

プレゼントは私

デュオ達と別れた私はナデシCONに戻った。

「ただいま……………」

転移した場所はブリッジ。

「お帰りなさい」

ルリちゃんが優しく出迎えてくれた。ちょっと嬉しい。

「格納庫にガンダムタイプのモビルスーツが二機と客室でお客様がお待ちです」

「わかりました」

それから私は客室に向かった。

客室にはピンク色の髪をした可愛い少女がいた。

「デュオとガロードは無事ですか？」

「もちろん、無事です」

「んっ」

フェルトに抱き着いて、その柔らかい二つの山を堪能しま……くっ、思考が変な所に逝ってしまいました。

「ガロードとデュオはこちらに残る事を決めましたが、フェルトは私のものですよ」

「うん……………あの二人が無事ならいいよ。どうせ、お父さんもお母さんも死んで私は一人だから……………あっ」

暗いし重いです。でも、抱きしめてくれるのは気持ちいいかな。

「？」

「お願いがあるんだけど……………いい？」

「何？」

「ガロードとデュオの彼女も本人の意思を確認して、呼んでほしい」  
本当にフェルトは優しい。

「そのつもりだから安心するといいよ……………」

「よかった……………んんっ!？」

フェルトと口づけをして、ベットに押し倒しました。

うん、胸の感触に我慢できなかった。身体は女、心は男だから。

フェルトさんとイチャイチャした後、格納庫に行ったの。

「お帰りなさい」

「ただいまアーニャ……………何してるの？」

度の入っていない眼鏡を掛けて、白衣を着た小さな少女がいた。

「改造？」

ガンダムデスサイズ・ヘルカスタムとガンダムダブルエックスの前で、作業機械を動かしながら小首を傾げるアーニャ。

「既に魔改造されてるんじゃない？」

「まだまだ甘い……………ちよろ甘い？」

「いや、知らないけど……………」

「ヘルカスタムとダブルエックスは出力と装甲しか改造されて無い」  
それはダメかな。

「だから……………ヘルにはスラッシャーシステムとミラージュコロイド、ボソソジャンプシステム……………羽は取り外すし可能にして、

シールドビットにしてみる」

スラッシャーシステムはビームの刃を回転させながら飛ばすみたい、シールドビットはサバーニヤみたいなの？

「ダブルエックスは……………わからない……………」

「ニュータイプ用のシステムがあるし……………マイクロウェーブ送信施設も無いから……………待つて、相轉移システムを応用すれば、直接エネルギーを供給出来る？」

「だぶん、いける？」

助手のアーニヤと見解は一致した。なら、後はやるだけ。

「ダブルエックスの羽とサテライトキャノンにエネルギー供給回路を作つて……………でも、肝心のエネルギーはどうするの？」

「ん……しばらくはナデシコから供給して……………うん、やっぱり本拠地を作る。どう考えても、ナデシコの性能を發揮しきれない」

「わかつた。とりあえず、改造する」

「よろしく」

改造はアーニヤに任せて、私はブリッジにいるルリちゃんに連絡を取る。

「ルリちゃん、搬入作業が完了しだいボソングジャンプの発動準備をよろしく」



『炉の暴走と同時に合流ポイントに移り、回収ですね』

「うん。準備が終わったら、アズラエル財団のハッキングと私と同じ姿の人達を探して欲しい……………」

『了解しました』

さて、私はプレゼントの用意。

深夜、動力炉の暴走を確認した私達は合流ポイントに移り、デュオ達と合流した。

「「「お疲れ様」」」

「「「おう」」」

ブリッジで簡単な挨拶と自己紹介をした。

「しかし、こんなでかい船で乗組員がこんだけって……………」

「一人で動かせる戦艦がコンセプトですから……………」

「無茶苦茶だな」

デュオの意見には同意する。ちなみに、質問に答えているのはルリちゃんです。

「ガロード、デュオ」

「ん？」「なんだ？」

物珍しそうに見ている二人……………ガロードの眼は何が変だけど、気にしない。

「プレゼントがありますので、どうぞ」

可愛らしく包装された大きな箱を二つ、彼等の前に差し出した。

「なんだろう？」

「嫌な予感しかしねえが、開けるしかねえ……………行くぞガロード！」

「おう！」

二人が同時に箱を開けた瞬間、デュオは吹き飛ばされ、ガロードは盛大に鼻血を噴出した。

「あつ、ゴメンデュオ……………つい……………」

「ガロード大丈夫？」

中から出て来たのは二人の少女。その格好はまさに私がプレゼント……………つまり、裸にリボンを巻き付けただけなの。

「ティファ、その格好は……………」

「ガロードがこの格好だと喜ぶって……………」

「ぐっ、その通りだ……………」

「ガロードのエッチ……………」

こっちは概ね大丈夫みたい。もう一方は……………大変そう。とりあえず、デュオが死にそうになっていた。

「ヒルデ……………ひでえぞ」

「ごめん、つい……………」

「バカばつかです」

ルリちゃんのあの台詞が聞けた。

「まあ、部屋を用意したから好きに使って……………」

「ああ……………」

「行こう……………」

デュオはヒルデに連れられて、ガロードはティファを連れて行きました。

ちょっとやり過ぎた？

「ん……………」

「アーニヤ、何してるの？」

「記録？」

小首を傾げて可愛くしてるけど、盗撮だよ？

そのエブレインに写っている映像はガロード、ティファの部屋とデユオ、ヒルデの部屋だよね？

「まあ、いいかな……………」

それから、全てを一旦忘れて、ゆっくりと休みました。

次の日、食堂に集まった私達はある問題に悩んでいた。

「で、大浴場、露天風呂、大森林公園、海水浴場、リクリエーションルームに売店など、かなり場違いな施設があるのに、コックと医者がないってどういう事かしら？」

「『忘れてた』」

「ご飯はカロリーメイトじゃないの？」

久しぶりにシュミレーターから出て来た……………出したステラが、そんな事言ってきた。

「……………とりあえず、この中で料理が出来る人は？」

ヒルデさんが聴いて来たけど、私、ステラ、ルリ、アーニヤは手を挙げずに眼を逸らすしかなかった。訂正、ステラとアーニヤは興味

無しと言う感じで、エブレインを使ったシュミレーションで戦っている。

「俺はサバイバル料理なら出来るぜ」

「俺も」

「どうせデュオと同じレベルでしょ。フェルトやティファは？」

「一般的には出来ます」

「勉強中です……………」

ティファのはガロードのためだよね。

「なら、基本的に私とフェルトで作るか。ティファはサポートしながら覚えてね」

「はい」

二人が元気よく返事をして、次の議題に入りました。

「医者はどうするの？」

「私達、魔法士はエブレインにより身体の手帳が管理されていて、病原菌の駆逐や身体の手帳調整などを自動でしてくれるから、よほどの事がない限り病気にならないよ。例え大怪我しても、培養槽に入れば治るよ」

「それはアンタ達だけでしょ！ だいたい、軽い怪我でそんなの使

「つてたらコストと時間がかかりすぎでしょうがっ！」

「ごもつとも……………」

「お医者さんと料理人さんの確保が大事ですね。」

「じゃあ、私のハーモニクス……………分身達を頑張つて狩つて行きましょう」

「それはそれで、怖いよな」

「確かに」

「この話はここまでです。次の案件に付いて報告を受けましょう。」

「ルリちゃん、報告は何かある？」

「はい。アズラエル財団を調べた結果、四ヶ所の軍事基地に隠し財産がある事が見付けました。警備はかなり厳重ですが、モビルスーツなら問題は特にありません。しかし、軍事基地の幾つかにご主人様……………カナデ様と同じ姿のハーモニクスが確認されました」

「つまり、強力なモビルスーツが出て来る可能性もあるって事か？」

「そうなると難易度が跳ね上がるな」

「デュオとガロードの言う事はもつともかな。警備はガンタンクがメインだから、たいした事無いと思うけど、私達が召喚するパイロットやモビルスーツは英雄クラスの強力な存在だから、存在するだけで難易度は跳ね上がる。」

「目的はアズラエル財団の隠し財産だけど、ハーモニクスを発見しだい、ナデシコをそこに投入して、基地もろとも跡形も無く消滅させようと思う」

「その場合、俺達はナデシコの護衛でいいな？」

「はい。フェルトさんはルリちゃんのサポートをお願いしますね」

「わかった」

これでナデシコは問題無いし、次はステラかな。

「ステラはもう一機のダブルエックスを使ってね」

「うん。ステラ、頑張る」

もう一機のダブルエックスはティファの召喚時に付いてきた。Gビット付きだね。Gビットはガロードのダブルエックスに付けます。

「第一部隊はアーニヤ、第二部隊はデュオ、第三部隊はガロードとティファ、遊撃にステラとルリちゃんかな。ヒルデさんの操縦技術は低いから、子供達の世話をお願い」

「リーオーじゃ話しにならないから仕方ないわね。そっちは任せてよ」

「ティファにはエブレインを付けさせて貰って、エブレインで他人の悪意とかをカットしちゃおうと思います」

「ぜひ、ティファのためにも頼む」

「はい、お願いします。私はガロードとどこでも一緒にいたいですから……特に戦場ならなおさらです……」

「ティファ……」

「ガロード……」

ダメだ、二人の世界を作ってる。

「二人は放置して、作戦を練りましょうか……」

「うん」「ああ」「はい」

そして、私達は襲撃計画を立てて準備を始めました。



## 何故かモバイルスーツより怖いアーニャとルリ（前書き）

今回はデスサイズヘルとダブルエックスのデータに加えて、誰がどんなイブレインを持っているかを説明します。

## 何故かモビルスーツより怖いアーニャとルリ

作戦開始前にどうにかダブルエックス二機とデスサイズ・ヘルカスタム一機の改造と、ティファ、ガロード、デュオ、ヒルデに、マシンチャイルド化、エブレインの作成の目処がついた。その中でもティファは魔法士の中でもレアな天使……………同調能力と呼ばれる特殊な能力が使えるエ・ブレインを手に入れました。

このエブレインはあらゆる魔法士の中でも特出したエ・ブレインの容量を持ち、一般人はもちろん、たとえ魔法士が相手であっても行動の一切を支配下に置き、情報を読み取ることも可能。その代わりに痛覚なども全て受け取ってしまう為、支配した相手を攻撃する事は出来ない。

同調能力の詳しい力はエ・ブレイン内の巨大なメモリ内に対象の情報すべてを取り込み、情報の側から支配する。ただし、痛覚もフィードバックされるので攻撃には使えず、あくまでも足止め用である。医療などにも応用が利く。特殊なデバイスがない限り効果範囲は自分を中心に一定の半径内であり、かつ無差別に支配下に置くので遠距離には向かない。さらに領域内の情報量が多すぎると当然ながらエラーを起こして停止してしまうため、ある意味で最大の敵は数を頼みにした一般兵・群衆と言えます。

どう考えても、ティファとルリちゃんに相応しいエブレインかな。これは頑張つてルリちゃんに二個目のエブレインをあげるべきだけど、例外を除いて一つしか手に入らないので、ステラのエブレインを解析して技術力をあげなきゃいけない、頑張ろう。

「うん、デスサイズヘルが仕上がった」

「うん」

デスサイズヘルカスタムの現在の仕様はこうなっている。

ガンダムデスサイズヘル（EW）

Gundam Deathscythe-Hell

型式番号：XXXG-01D2

全高：16.3m

重量：7.4t

出力：6,009kW（3000UP）

推力：105,380kg（30000UP）

装甲材質：ガンダニウム合金、PS装甲

武装

バルカン×2

ビームシザーズ

アクティブクロークビット

システム

ハイパージャマー

ミラージュコロイド

ボソンジャンプシステム

スラッシャーシステム

ディストーションフィールド

搭乗者 デュオ・マックスウェル

動力は相転移エンジン二基を搭載し。そのため、短距離転移ならある程度自由に出来るようになりました。

しかも、デユオ本人は騎士の魔法士だからかなり強い。

魔法士の騎士はかなり強い力を持っているの。

一つ目は情報解体。これは物質を情報の側から破壊する。情報の側から破壊された物質は原子単位で分解されるから防ぐのが大変。原則として単一分子で構成されている物質（石、金属など）は情報的にもろく、思考・演算する物質（生命体・コンピュータなど）は情報的に強固であるよ（現実世界とは正反対の性質を持っていることになる）。魔法士は情報の塊であり、解体はほぼ不可能な存在。

二つ目は身体能力制御。これは運動能力と知覚速度を加速できるの。最高レベルの騎士が最高レベルの騎士剣を使ったとしても、運動速度の加速率は100倍が限界。不自然な動作から発生する衝撃などを打ち消す演算も必要であり、運動能力を加速し過ぎると、反作用で体を壊してしまう。そのため、使用者は高速で動きつつも運動エネルギーは普通に動いているときと変わらない。なお、いくら加速しても蓄積する肉体疲労は通常と全く変わらない。

三つ目は騎士が最強と言われるゆえんの自己領域。光速度（光速度を越えることは不可能だけど、光速度の値そのものは改変可能である）、万有引力定数、プランク定数を改変し、自分の周囲の空間を「自分にとって都合のいい時間や重力が支配する空間」に改変する。重力制御による空中移動と並行して亜光速（E・ブレインの能力・騎士剣の性能により差が生じる）で動ける為、他者からは「瞬間移動した」ように見える。欠点は相手が自己領域に入ると同等の恩恵を受ける為、近接攻撃の際に能力を解除しなければならない事。また、二つの自己領域がぶつかり合うと互いの自己領域の境界面に矛盾が発生して強制終了する。

「つまり、ミラージュコロイドで消えて、ボソンジャンプで施設内に侵入し自己領域で対象に接近し情報解体で目標を殺し、ボソンジャンプで帰還……………完全な暗殺者？」

「デュオの騎士剣は鎌とデスサイズヘルそのものでいいよね」

「うん」

騎士剣は、騎士の能力を補助する剣型のデバイス。この形状は情報解体が通用しない人体への攻撃を目的としている。刃はミスリル製で、柄に演算中枢の結晶体が象嵌されている。「身体能力制御」による加速度はこれの演算を使用することで大幅に上昇し、また自己領域の展開プログラムは騎士剣に搭載されているため騎士の強力はさはおおむねこの騎士剣に頼っている面が大きい。

「普段は腕輪にしておいて、予備として小さな髪留めに偽装しておこう」

「隠しておくには調度いい」

アーニヤも賛成してくれた。

「眠いけど次に行こう」

「うん」

私達はこのままダブルエックスの仕上げに入った。

三時間後、明朝六時にガンダムダブルエックス二機の改修が終了。

「自己領域がなかったら危なかった……………」

既にアーニヤは寝かしつけた。本作戦に私はいらないから。  
ダブルエックスはこんな感じになった。

ガンダムダブルエックス

G u n d a m   D o u b l e   X

型式番号：G X - 9 9 0 1 - D X

分類：サテライトシステム搭載型M S

所属：新地球連邦軍   フリーデン   カナデの私兵

生産形態：ワンオフ機

頭頂高：1 7 . 0 m

重量：7 . 8 t

装甲材質：ルナ・チタニウム合金、P S 装甲、オリハルコン

## 武装

ツインサテライトキャノン

ハイパービームソード×2

D X 専用バスターライフル

プレストランチャー×2

ヘッドバルカン×2

ディフェンスプレート

ロケットランチャーガン

G - ハンマー

ツインビームソード

ビームジャベリン

ガンダム型ビット

システム

フラッシュシステム

サテライトシステムMk？  
デイスティションフィールド  
ボソングジャンプシステム

搭乗者ガロード・ラン（サポーター：ティファ・アディール）、ス  
テラ・ルーシュ

こちらでも動力炉はヘルと同じ。しかし、羽……………リフレクターに  
相転移システムを使ってサテライトキャノンに直接チャージする事  
に成功。だけど、チャージに時間がかかるので、他から供給出来な  
い限り、何発も撃てない。ボソングジャンプも同じ。

「ガロードも騎士だから、騎士剣はライト……………サイブレードに  
しておく。後、デザートイーグルでいいよね……………うん」

ついでだから、ルリちゃんのエブレインの能力も説明する。

ルリちゃん的能力は未来予測。超高速演算によって短期的な未来  
を完璧に予測出来る。ただし、いくら予測が完璧であっても、速度  
や体勢などの原因で「理論的に回避不可能な攻撃」に関してはどう  
しようもない。欠点は、相手の攻撃方法を知らないと対応しようが  
ないため、能力の分からない相手に対しては使えないことと、敵が  
二人になると負担が2倍以上になること。簡単に言えばゼロシステ  
ムの上位版の力を持っている。

次に破砕の領域（Erase circle）

空気分子の動きを正確に予測し、そこに音による変化を加えること  
でバタフライ効果によって論理回路を形成する。この論理回路は騎  
士の情報解体と同じ能力を有し、なおかつ騎士のものより解体する  
力は強い。起動するにはルリのエブレインの機能の75パーセン  
トを超高速の演算装置として使用しなければならない（ティファの

600倍の演算速度が必要)為、情報の海へ接続する能力と大きなプログラムを保存できる程の記憶領域を持たない、演算に特化したイーブレインを持つルリちゃんにしか使えない。論理回路の大きさは約50cm。また、情報の海へ接続するわけではなく、厳密に言えば魔法ではないため、ノイズメイカー(電磁雑音放射デバイス。一定パターンの電磁ノイズを放射することで魔法士の情報制御を阻害する、対魔法士用兵器)の影響下でも使用が可能(予測演算さえできれば使える)とされている。

最後の虚無の領域(Void sphere)は破碎の領域の発展型。形成した論理回路が新しくひとまわり大きな論理回路を形成し、その形成された論理回路がさらに大きな論理回路を……という具合で指数関数的に論理回路を巨大化させ、最終的に自らの大きさに耐えられなくなつた論理回路が周囲の物質を巻き込んで自壊することによつてありとあらゆる物質を確実に解体する。論理回路の大きさは調節可能であり、最大(ナデシコンの演算つき)で直径約30km。欠点は1度起動するとイーブレインが過負荷でオーバーフローし、3時間以上の休止時間が必要な点。その間は一切イーブレインを用いる能力が使えなくなる為、まさに最後の切り札と言ふべき技。

「未来予測とナデシコン……オモイカネに搭載されているゼロシステムと合わせると戦闘空域でもかなりの予測が出来るみたいだから、積んでおこつ」

当然、皆のイーブレインにはゼロシステムが搭載されているの。

「ステラは双剣と言われる特別な魔法士」

双剣は騎士の一種で「規格外」の魔法士。本来一人につき1つしかないイーブレインを右脳と左脳に一つずつ持っているため、自己領域と身体能力制御の同時起動を行うことが出来る。そのため、騎士の



弱点である「自己領域から身体能力制御への切り替えのタイムラグ」がない。ただし並列処理中は身体能力制御の加速率が若干低下する。また、二つのイーブレインに別々の身体能力制御を処理させることで通常の騎士の上を行く移動手段も使える。

「だから、色々調べる。アーニヤは光使い」

光使いの力は時空制御で、空間を歪曲する事で攻撃を回避する「Shield」と、局所的に閉鎖した空間で光や原子、分子を加速して荷電粒子砲のように撃ちだす「Lance」がその代表例である。なお、「Lance」は光の速さで迫ってくる為、いかなる魔法士であっても発射を認識してからの回避は間に合わない。射出を予測出来た場合は別だけど。

D3………光使い専用外部デバイス。正式名称Dimensional Distorting Device（訳：次元歪曲装置）。外見上は正八面体の透明結晶で、表面全体に論理回路が刻印されている。光使いの能力は自分の周囲しか操作できないため、戦術の柔軟性を高めるために作られた。D3自体も空間の隙間に出し入れすることが可能。ぞくに言う四次元ポケットを持っている感じ？

光使いの正体は、時空制御特化型魔法士。遠距離戦闘・対艦戦闘のスペシャリスト。Lanceで戦艦だつて沈めちゃう、歩く恐怖の戦術兵器アーニヤちゃん。

「ルリちゃんとアーニヤが組んで、砲撃したら目も当てられない……」

未来予測とアーニヤの砲撃………百発百中の光の雨が降り注ぐ………勝てないよね。

「救いはD3が巨大化してない事かな………したら、サテライト

キャノンの連射が来る感じになるのかな……うん、止めよう……  
大人しく寝よう」

私は格納庫にある仮眠室で眠りに付きました。

## 何故かモビルスーツより怖いアーニャとルリ（後書き）

アーニャ：光使い

ルリ：空族（名前不明）

ステラ：双剣

ガロード：騎士

デュオ：騎士

ティファ：天使

ヒルデ：未設定

カナデ及びハーモニクス達：悪魔使い×2（サクラと鍊の奴）

ちなみに、カナデ達のイブレインにはプログラムが入っていないのが多い。Angel Playerで事足りるために、そこまで研究していない。

精々、自己領域と身体強化しかしていません。これから使いだすかもしれませんけど。

## アーニャSide 元家政婦は見た！（前書き）

なぜだ、MS（NK）戦のはずが……書き終わると魔法士の戦闘がメインになってました。

アーニヤ Side 元家政婦は見た！

Side アーニヤ

私が今いる場所はイタリアにあるアズラエル財団の施設軍事基地。身体強化とボソソジャンプで簡単に侵入出来た。

「こちら、異常無し」

『わかりました。そのまま地下に向かって下さい。その施設の警備システムは全て掌握していますので、警備兵には気をつけて下さい』

「了解」

ルリとの通信を繋げたまま、エブレインに取り込んだ見取り図に従って地下へと下りて行く。

空間歪曲で私の姿は見えないから、ぶつからないように気をつければいい。

地下に行き、隠し通路を進んだ先にコンクリートで塞がれた区画があった。

「1111?」

『はい。そこに数十億ドル分の金塊があるはずです』

「了解……………おいで、D3」

三十センチメートルくらいの正八面体のデバイスを、隙間から取り出して、最小の出力で広範囲にLanceを放つ。すると、コンクリートや合金で守られていた壁はあっさりと消滅して、入口が出来た。

「金塊が沢山」

目の前には山と積まれた金の山。私は気にせずに中に入った。すると、警報がけたたましく鳴り出した。

『そこは別系統な上に、外部から物理的に遮断されていたみたいで  
す。ごめんなさい』

「大丈夫、先に回収する」

金塊を全て隙間に仕舞って、D3を十三個呼出し、私の周りに六個配置する。残りの五個は迎撃、二個は隠しておく。

「いたぞっ！」

大量の兵士が直ぐに駆け付けて来たので、指差してD3に命令を送る。

「Lance」

指示を出した瞬間、D3の一つから光りの槍が放たれ、通路にいた大量の兵士を文字通り跡形も無く消し飛ばし、通路の後ろの壁も消

滅させ、外へと続く道が出来た。

『あつ、ここにムルタ・アズラエルが来ているみたいです』

「なら、挨拶して帰る」

『了解しました』

私は面倒なので、自動識別モードとゼロシステムを使ってオートでD3を起動させました。そのお陰で、私に向かってくる兵士は死に飛んで来る銃弾はD3のShield（空間歪曲）によって全てが完全に防がれています。

「ばけ……………」

「助け……………」

私の邪魔をする者は容赦しません。だから、すんなりと進んで行きます。

そこは豪華に彩られた貴賓室。そこに奴はいた。私は今、天井裏からアイツ等を見ている。

「何事だ？」

「アズラエル様、基地に何者かが侵入したようです」

「馬鹿な、警備は何をしていた!？」

「それが、施設がハッキングされたようで、こちらの操作を一切受け付けません」

ルリの手腕は見事。あの部屋は仕方ないし、無警戒に踏み込んだ私の責任だから。

「使えない奴め……………死ね」

アズラエルが兵士の一人を銃殺した。

「報告します!」

「なんだっ!」

「ひっ!」

「早く報告しろ! 死にたいのかっ!」

「はい! 金庫の中身が空っぽになっています!」

「ふざけんなっ!? 死ねっ! くそっ、くそっ、第八ラボといい、なんでこんな事になるんだっ!」

新たに撃ち殺した兵士の頭を何度も何度も踏み付け、八つ当たりをするアズラエル。

「いいか、なんとしてでも取り戻せ! さもないと、貴様等全員を



殺してやるっ！」

「……はいつ……」

残っていた兵士も慌てて外に出て行き、アズラエルと二体の死体だけが残った。

「おい、お前も行って来い！ お前なら侵入者を簡単に排除出来るだろ！」

虚空に向かって、アズラエルが大声で叫んでいる。やっぱり、危ない奴。

「ボクがいなくなれば、君は侵入者と二人つきりになるけど、それでいいのか？」

と、思ったら実際に声が帰ってきた。

「なんだと！？」

しかも、感づかれているみたい。これはまずい。

「何故さっさと言わなかった！」

「ボクの仕事は君の護衛だ。いくら連邦の士官とはいえ、私設基地の事まで介入する理由は無だね」

「貴様っ！？」

「ボクを動かしたいなら、護衛とは別料金だ」

「く……………六百万出すから始末しろ」

「一千万ドルだ。鏹一文負けない」

「わかった、払う！」

「了解」

その言葉と同時に私はチャージした十三個全てのD3から、部屋全体にLanceを放ち、部屋中に破壊の光りで満たした。

「なんだこれはっ!？」

「危ないね」

結果は失敗。信じられない事に、アズラエルの前いきなり現れた小さな少女がLanceを刀で切り裂き、破壊の光りを防いだ。その少女は水色の髪のをショートにして、東洋の民族衣装を着ている。さらに、目隠しまでしている……………よく斬れたと思う。

「驚いた……………いくら神刀を騎士剣にしたとはいえ、D3のLanceまで情報解体神出来るとわね」

相手は騎士の魔法士みたい。

「助かったのか……………?」

「一応かな。ボクもいきなり、部屋事破壊するとは思わなかった。未来予測とゼロが反応しなければ死んでいたね」

ハーモニクスか喚ばれた英雄さん？

「この様な暴拳に出たのはきさ……………馬鹿な……………第ハラボの爆発で死んだはずだ！ いや、それ以前に精神が壊れていたはずだぞ！？」

天井事破壊したから、空中に浮いている私の姿がまる見えになっている。

「復活ブイ」

「ブイしゃねえっ！？」

「というか、普通に考えて身代わりだと思うよ？」

ネタばらしされた……………残念。なので、人差し指で口の端をニイーてしてみた。

「貴様、おちよくっているのかっ！？」

「うん」

私も私の姿を汚した怨みは忘れていない……………必要だから生かしてるだけだから。

「おのれ……………」

「落ち着きなよ。馬鹿なんだから、相手の思惑に乗ったらダメだよ」

「それもそうだな……………ん？　何か馬鹿にされたような……………」  
何気に辛辣。

「まあ、いい。それより、何故知らせなかったっ！」

「だって、聞かれなかったから」

「こいつら……………」

「それに、人形遊びは楽しかった？」

その言葉で、アズラエルは顔を真っ赤にしながら銃を撃って来たけど、私には届かない。

「まさか、あれが人形だと……………？」

顔の色が赤から紫に変わった。

「そう、あれはマスターと私に似せた自動人形……………意思の持たない操り人形」

「ありえ……………いや、クローン技術があるのだから可能か……………では、貴様の目的は私の抹殺か？」

震えながら少女の後ろに隠れるアズラエル。

「違う、私達の目的は感謝料の請求」

「なんだと……………」

「だから、アズラエル財団の隠し財産を頂いた」

D3のチャージは完了。今の間に連絡を取る。

『ルリ、ハーモニクスか英雄を発見。交戦に入る』

『了解。状況次第で上空から支援砲撃を行います』

『お願い』

準備は完了。久しぶりの実戦になるから、気を引き閉める。

「おのれ……………この事はオーブに講義してやる！」

「お好きにどうぞ……………」

そこまでの力が遺っていたらだけど。

「その場合、貴方達が私達にした事や非人道的な実験、不正や犯罪の数々をダイジェストで世界中に流すってマスターが言ってた。もちろん、影武者の事も」

「証拠はどこにあると言うのだ？」

「家政婦は見た？」

「何を言っているんだ！」

「それに、元だよ」

うん、証拠の数々……………私の記録を見せてあげる。

「なっ！」

「これは言い逃れ出来ないね」

五分ほど流すと了解してくれたみたい。

「くっ、こうなれば……………構わん、殺せ！」

「了解……………騎士、鳩、ゼロを並列起動、身体能力を四十六倍に定義」

そう呟いた瞬間、少女の身体がかなり加速し、接近して来た。私も身体能力を十倍に定義していなかったら、見えなかった。

「D3」

五個のD3からLance……………擬似的荷電粒子砲を放ち、牽制する。

「ちっ」

少女は身体を捻って、一つ目のLanceを紙一重で回避して、二つ目を捻った身体を戻しながら刀を振るい、Lanceを切り裂き、反す刀で三つ目を防ぎました。残りの二つは壁を蹴って方向転換をして回避した。

「まだ……………」

私の周りに浮いている六個のD3に、ゼロシステムに従って発射シークエンスを起動する。

「これは少しまずいね……………騎士を更に並列起動……………身体能力を両方八十倍に定義。容量不足、未来予測を停止」

身体能力を限界まで強化した状態（騎士とは雲泥の差）でも、霞んで見えるくらいの速さになって、次々とLanceを切り裂いていつの間にか私に近づいて来た。

「これで終わりだ」

「っ！ S h i e l d」

D3六個で空間歪曲を行い、六角形のS h i e l dを作り出す。

「無駄だね。情報解体」

空間歪曲のS h i e l dをD3ごと情報解体され、D3が砂となって崩れ落ちた。

「これで、王手だね？」

「まだ……………やれる……………」

D3に迫って行く刀を見ながら、私は隠していた空間から二個のD3から目標に向かって二つのLanceを放った。

「無駄な足掻き……………あっ、まずい……………」

少女は脇目も振らずに、少女の横を通って行ったLanceを追いつけた。

「ちっ、間に合わないか……………身体能力強化を強制停止、自己領域を展開」

少女は一瞬だけ遅くなって、即座に掻き消えた。

「なっ、なんだっ！」

「ふう……………なんとか間に合った……………」

少女は瞬間移動をしたように一瞬で目標のアズラエルの前に出現して、Lanceを切り裂いた。

「続けて撃て」

目標のアズラエルに向かって、残りの五個も合わせた合計七個を二個、二個、二個の順で立て続けにLanceを放ち、ゼロシステムに従って残り二個をランダムに撃って行く。

「これは動けない……………」

「おい、私を最優先に守れ！」

そして、私はゆっくりと後ずさる。

「その場合、彼女を殺せないけどいいのかい？」

「構わん！」



「了解……………それに、君は逃げる気かな？」

「一時的な戦略的撤退」

私はD3にアズラエルを目標にした攻撃を続けさせながら後ろに下がる。そして、後ろにある程度下がったら高度を上昇させて、開けた天井から外の青空へと飛び出した。

「どうするの気だい？ 旦那が自由になったらボクは気に追い付くよ」

「問題無い……………私が勝つ」

「嫌な予感がするね……………」

「だっ、大丈夫なんだよな！？」

「こればかりは……………ボクにはわからないよ」

「なんとかしろっ！？」

「無茶を言っ……………」

上空で手を振ると同時に、空間が割れてD3と同じ様に空間に仕舞っていたモルドレッドが出現した。

「なんだあれは！」

「ナイトメアフレーム……………いや、既にモビルスーツか。確かに

アーニヤにはこれがあったね……………これはまずいな……………」

私はD3の二個で防御しながらモルドレッドに乗り込んだ。

シートに座り、コンソールからプラグを取り出して、首の後ろにある接続口に繋げて、モルドレッドとエーブレインを完全に同調させる。そうすると、自分の視界のようにクリーンに見える。

「準備完了」

そして、操縦用の球体に手を置いてIFSに接続する。

「システムオールグリーン……………D3を回収開始……………完了。  
砲撃を確認、ディストーションフィールドを展開、ダメージ無し」

こちらに気付いたガンタンクから、次々と砲撃を行われるが、その全てがディストーションフィールドによって完全に防がれている。

「ガンタンクの優先度は低、最優先目標の殲滅を優先……………あれ、  
いない……………」

いつの間にか二人は居なくなっていました。

「レーダーにも反応は無い……………なら、基地ごと滅ぼす」

私は基地が一望できる場所まで上昇し、両肩にある二対の装甲を眼前で連結する。連結させて構成した4連ハドラン砲を眼下の基地へと向けた。

「シユタルクハドロン…………ふぁいやー」

輻射波動と呼ばれる高周波で出来た深紅の奔流を基地に解き放った。そして、基地が破壊されるのを見て、ガンタンク達はいつそう砲撃を激しくして来た。

「面倒…………纏めて滅ぼす……………」

シユタルクハドロンを一旦止めて、前方にレンズのように空間歪曲を作りだして、シユタルクハドロンを再度解き放った。すると、深紅の奔流は空間歪曲レンズを通して拡散して基地全体に流星群のように降り注ぎ、防衛部隊もろとも消滅させた。後に残ったのは、クレーターだらけの地面だけだった。

「抹殺対象の生死は不明……………第一目的は完了……………任務完了と判断し帰還する」

『了解、お疲れ様でしたアーニヤ。転移サポートを開始します』

「お願い」

『これより、ボソンジャンプを開始します』

そして、モルドレッドの転移が開始された。

「……………疲れた……………」

私はそのまま身を任せて眠りに付いた。

S  
i  
d  
e  
O  
u  
t

騎士の能力はどう考えてもチート（トランザム）

S i d e   デュオ

さて、改造されたデスサイズヘルで暴れる時間がやって来たぜ。

『転移準備完了しました。発進シークエンスどうぞ』

フェルトの声に従ってシークエンスを開始する。

「デュオ・マクスウェル、デスサイズヘルカスタム行くぜ！」

カタパルトにより加速しながらボソソジャンプが行われ、次の瞬間には目標の基地の上空へと付いた。

「フェルト、目標はどこだ？」

『地下の二キロの地点に不自然な広さがあります』

「広さはどうだ？」

『デスサイズヘルが充分入る広さです』

なら、このまま行くか。

「サンキュー、フェルト」

『デュオ、気をつけてね』

「おう！ ジャンプ！」

俺は短距離転移を行い、目的の宝物庫へと向かった。

場所は確かにMSが充分に入る広さがある空間に転移した。

「いや、ある意味財産だよ……………プルトリウムだよ……………」

空間には所せましと並べられた大量の放射性物質のマークが入れられた保存器に入れられたプルトリウムがあった。

「フェルト、プルトリウムだが……………どうすんだ？」

『ちょっと待ってくださいね……………回収らしいです』

「どうやって回収すんだ？」

デスサイズヘルで転移させるのは無理だぞ？

『今からマスターが行きます』

「オッケー」

少し待つと、カナデが変な機械を持って現れた。

「なんだそれ？」

「ボソソジャンプの転移装置。デュオ、四方にこの四つの装置を配置して」

「ああ」

言われた通り、地面にモビルスーツで持てるような大きな装置を配置すると、四方の中心にナデシコの格納庫が写った。

「ありがとうデュオ。後は陽動をお願い。回収が終了しだい撤退するから、基地は完全に破壊して」

「おう、任せな」

俺は改めて地上に転移して、基地を破壊しだした。

しばらく破壊していると、ミサイルが飛んできた。

「無駄だぜ！」

来るミサイルを切って、発射口を破壊していく。

「おっ、ガンタンクのお出ましか……………じゃあ、死神のお出ましと行きますか！」

ゼロシステムを使い、砲撃を避けて接近してガンタンクの装甲を紙のように切り裂いていく。

「弱すぎるぜっ！」

出て来る端から全てを切り裂き、破壊を続けて行く。そして、ガンタンクが遠くに出て来た。

「丁度いい……………スラッシャーシステム起動」

システムを起動しながら、ビームジザーを振ると、刃が回転しながらガンタンクに向かって行き、ガンタンクを切断して行った。

「ヤベー、結構おもしれえな！ 自己領域展開」

自己領域を展開してスラッシャーを放つと、かなり速い速度で飛んで行き、逃げる間も無くガンタンクを破壊していった。

「問題はエネルギーだな」

当然、消費エネルギーが半端ねえ。まあ、エネルギー容量は莫大だけれどな。

「しかし、こいつはとんでもなくトリッキーだが強いな」

スラッシャーの刃もしばらく留まり、ゼロシステムにより計算された軌道を通り、確実に敵を殺していくからな。

「アラートだと？」

殺しながら考えていると、いきなりアラートが鳴り響き、改めてリーダーを見ると、こちらに接近する機体があった。



『デュオ、接近中の所属不明機の映像です』

表示された映像には赤い鳥のようなモビルアーマーが写っていた。

「おいおい、コイツは……………OZ-13MS……………エピオンじやねえか！？ 誰だ、誰が乗ってやがる……………ヒロかミリアルドの旦那か？」

『デュオ、ハーモニクスの可能性もある』

「カナデ、どうするんだ？」

『出来たら機体は捕獲したい』

『マスター、ボソソジャンプ反応です！』

「おいおい、追加かよ……………」

二体な上に、出来る限り機体を壊さずに倒すとか無茶苦茶だろ。

『ステラを今すぐダブルエックスで転移させて』

増援が来るならいけるか？

『了解しました。ステラちゃん、準備は？』

『出来てるよ……………』

『ステラ、お願い』

『うん、任せてカナデお姉ちゃん』

カナデの声にステラは元気に答えたが………こんな子供で大丈夫か？

『準備完了、発射シークエンスを譲度します。発進どうぞ』

『ステラ・ルーシェ、ガンダムダブルエックス……………出る……………』

その言葉と同時に、俺の横にガロードと同じガンダムがジャンプして来た。

『機体制御、問題無し……………敵は二体？』

「ああ。行けるか？」

『大丈夫。フェルト、ジャンプしてくる敵の場所をもう一機と重ねて』

『えっと……………はい、大丈夫みたいです』

そして、接近中の敵に向かって、リフレクターを展開してツインサテライトキヤノンをいきなりぶっ放しやがった。

「おいおい」

巨大な二つの光りの奔流をなんとか回避したエピオンと慌てて転移した所属不明機は多少なりともダメージをおったようだ。

「いきなり無茶苦茶しやがるな……………しかし、短距離転移が出来る機体か……………嬢ちゃん、あつちの黒い所属不明機のモビルアーマーはこっちで相手するから、赤い鳥……………エピオンの方を頼む！」

『うん。ステラ、鳥さんと遊ぶ』

本当に大丈夫かしらんが、やるしかねえ！

「死神のお出ましと行こうか！」

短距離転移……………ジャンプして敵の上空に出た俺は空中で回転しながら、デイストーションフィールドを纏った足で踵落としを決めてやった。

その瞬間、装甲が弾け飛んで、中から黒い重装甲の機体が出現した。

「パージ型のMSか？ それにしちゃちっちな」

重装甲を装備したわりに、脚部自体を巨大なスラスタユニットに変えてやがるし、さっきパージしたのだって高機動ユニットだろが……………パイロットの腕は悪く無いな。

『デュオ、所属不明機がナデシコの中にあつたデータより判明しました。機体名ブラックサレナ……………ナデシコの世界で最強と言われた人の機体です』

「それはある意味助かったな」

ジャンプ先を強制的にツインサテライトキヤノンの射線上に変えられたのに、即座に回避行動を行い、掠っただけに終わらした技量は

驚嘆に値するぜ。

『制御ユニットはこちらにあるから楽ですね。相手のボソンジャンプは封じておきました』

「了解」

不意打ちとはいえ、装甲を一個剥げただけでも儲け物だな。

「っと」

連続で放たれたビームを紙一重でか回避し、ジャンプで背後に移動してビームジザーズで切り付けるが、むこうも急降下して回避した。どうやら、ハンドカノン二個とディストーションフィールドによる突撃しか無いようだな。

「さて、行くか」

ジャンプを連続で行い、翻弄しながらディストーションフィールドを纏ったビームジザーズで切り裂いて行く。

『あはははは、死んじゃえ！』

むこうはビームサーベルで激しい切り合いが行っている。というか、それはダブルエックスの戦い方か？

「行けっスラッシャー！」

ジャンプしてはスラッシャーを放ち、ジャンプする。これを繰り返して行き、ブラックサレナを追い詰めて行く。

「おりゃああああっ！」

ビームカノンの切れたブラックサレナはディストーションフィールドを展開して突撃をして来た。

だから俺はアクティブクロークを解き放ち、正面からディストーションフィールドを纏って切り裂きにかかったが、スラスターを巧に操り避けられた。それが、隙になって攻撃される。

「甘いぜっ！」

分離したアクティブクロークは複数の鋭い刃となり、ブラックサレナを後ろから襲いかかった。

多数の刃に貫かれたブラックサレナは機能を停止した。

「フェルト、ブラックサレナの生命反応はどうだ？」

「ありません…………… スキャンした結果、死体も血も存在しません」

「それが俺達、召喚された存在とハーモニクスの運命か……………」

しかし、機体は消えないな。捕獲狙いだったからコクピットを狙ったんだが…………… 機体は生命体じゃないからか？

『あはははは、これで終わりだよ！』

ステラはエーブレインを機体と同調させて、身体強化を機体にし、自己領域まで展開して無茶苦茶な高速機動を行い、変形したエピオンを掴んで捕獲してビームサーベルを使ってコクピットハッチに穴を開け、そこから指を入れて無理矢理えぐり取り、パイロット

を押し潰した。

『捕獲完了』

「こっちもだ」

『二人共ご苦労様。こっちもプルトニウムの積み込みが終わった。そっちは全ての機体とパーツを回収して帰還をお願い。ルリ、ナデシCONで残敵の掃討をお願い。誰一人として逃がしちゃダメだよ』

『『了解』』』

それから俺はブラックサレナとその残骸やパージされた装甲を持って、ナデシコから降り注ぐ空を埋め尽くすような数々の光りを見ながら帰還した。

S i d e O u t

## 料理人と医者

S i d e    ティファ

私は今、とても幸せです。

いきなりガロードが消えた瞬間はとても不安でしたが、少し時間がたったら私の目の前には知らない女の子がいました。

その女の子の話で、ガロードが直ぐにこちらに来るから、ガロードの喜ぶ準備しようとの事でした。結果は、ガロードも喜んでくれたと思います。

「ティファ、大丈夫か？」

「うん。フラッシュシステムも問題無いよガロード」

「わかった。無理だけはしないでくれよ？」

「大丈夫」

例え何があっても私はガロードと一緒にいるから。

「精神の遮断はちゃんと出来てるか？」

「大丈夫、問題無いよ……………あつ、ルリちゃんからの情報……………」

…地下に大きな金庫があるって……………それに、地上にハーモニクス  
スの存在を確認したみたい」

「殺すだけで令呪による回収が出来るんなら、わざわざ危険を犯す  
必要は無いよな……………ティファ、ツインサテライトキャノンを使  
う」

「わかった。Gビットもガロードが操作して」

「いや無理だつて」

確かにガロードはニュータイプじゃないから、ニュータイプ専用の  
フラッシュシステムを使うGビットの使用は普通なら無理だけど、  
I・ブレインを使えば可能になる。

「いける。ガロード、私と一つになる？」

「えっ、ティファ、何言つて……………」

「嫌？」

ガロードに拒否されると、悲しくなる。

「いや、嬉しいよ！でも、こんな所で……………」

「よかった。同調開始……………」

「え？これはティファ……………」

「ガロード、私を感じて……………」



「ティファを強く感じる……………」

同調能力により、私とガロードは繋がる。これで、ガロードとダブルエックスは私の支配下に入った。だから、私は私の意識下でガロードを自由にする。

「これで……………どう……………?」

「確かにティファを通してGビットを感じられる」

同調能力で統一してから、ガロードに支配権を譲り渡したの。

「うん、私もガロードを感じる……………ん……………」

キスをしていると、通信が入りました。

『何時までいちゃいちゃしてないで、お仕事をお願いします』

「「はい……………」」

ルリちゃんに怒られました。

「んじゃ、いっちょやりますか!」

「うん」

ガロードがGビットを整列させて、Gビットのサテライトキャノンを準備して、基地に向けて引き金を引いた。

光りに包まれた基地は、何一つ無くなり、平らな土地があるだけでした。

「じゃ、Gビットで掘り出すか」

「がんばって」

「おう！」

結局、地下に残っていた人は投降して来ました。カナデさんがその人達を同調能力で調べて、安全と判断した人だけ助けました。

S i d e O u t

S i d e    ? ? ?

ふう、なんとか脱出が間に合ったね。

「なんだとっ！　ふざけるな、そんな馬鹿な事があってたまるかっ！？」

アズラエルの方で何かあったみたいだね。まあ、おそらくはオリジナルのカナデがやったんだろうね。

「くそっ！」

「それで、電話はなんだったんだい？」

ボク達は、イタリアのミラノにいる。それも、アズラエルを気絶させてボソソジャンプしたただけなんだけどね。

「財団の私設基地のいくつかと連絡が取れないうえに、アズラエル財団の口座から一切の金が無くなった……………」

地面にひざまづき、orzのポーズをしている。いい気見だね。

「そうか……………では、ボクは帰らせてもらっよ」

「なんだと！」

「護衛代金は既に請求してあるから、ボクには関係無い事だ。それに、ボクを雇う代金はかなり高いよ？ お金が無くなった状態では無理だよな」

「ふん、好きにしろ！ これだから化け物は……………」

「それじゃ……………さようなら」

アズラエルを無視して、天之尾羽張を杖がわりにしつつ歩いていく。

「今日は父さんもいるだろうから、パスタでも買ってこよう」

Ｉ－ブレインを使い、多めに頂いたお金で食料やワインを購入して

ボソソジャンプで帰った。

ボクが父さんと暮らしているのは安アパートだ。

「ただいま」

「お帰り」

「父さん、帰ってたんだね」

「ああ、昨日は夜勤だったからな。しかも、訓練だぜ……………」

メビウス・ゼロだっけ、あれは性能引くすぎなんだよね。

「まあ、ご飯を作るよ」

「頼む。しかし、ハジメを引き取ってよかったよ。お陰で家事をしなくてすんだ」

「お父さん……………いえ、ムウ……………早く、彼女を作るべきだね」

「うるさい。だいたい、この頃軍は忙しいんだ」

「プラント？」

「そうだ。そっちにもいつてるだろ？」

Ｉ・ブレインのメールを確認すると、人事部と技術部から収集命令が来ていた。

「確かに戦力として参加要請が来ているね」

ボクは大西洋連邦と契約している。技術の一部提供の代わりに協力者としての士官とモビルアーマーなどの兵器の所持に関する許可と、個人による持ち込み許可を手に入れたんだ。

「で、どうするんだ？」

「もちろん、参加するよ。お父さんの機体も出来たしね」

「俺の機体なんか作ってたのかよ」

「ああ。結構強いよ」

用意したのは ガンダムだしね。

「じゃあ、楽しみにしているか。それより、飯が先だな」

「はいはい」

ザフトに一人、オリジナルが不明、連合にいたハーモニクスは殆どいなくなっただけ、オーブやどこにも付いていない奴らはまだまだ存在しているから、そっちも考え無いとね。

S i d e O u t

ルリちゃんがアズラエル財団やロゴスから徹底的にお金をしほりとつたから、資金はかなり豊富になった。

ガロード達が持って帰ってきた財宝もある。

まあ、昨日は作戦が無事に終わったから、ステラ、ルリ、アーニヤ、フェルトの四人には気絶するまで可愛がってあげたので、手は付けて無いけど。

「ルリ、火星にボソンジャンプして」

「了解しました」

さて、ブラックサレナもハーモニクスみたいだったから、かなりポイントも貯まったし、料理人と医者を召喚しよう。

部屋を移動してから召喚した。

召喚した料理人は二人（一人＋一）で、華麗なる食卓から来てもらった。

土門海<sup>どもんかい</sup>、エディブルガーディアン No. 1。37歳。北海道出身で、割烹を主とした料理人。孤児だったため施設で育ち、そこで料理を覚える。幼い頃から活躍しており神童と呼ばれたほどだったが、16歳から36歳まで20年間消息不明となる。その間の黒い噂が多々飛び交うが、どれも信憑性に欠けるものだった。そして再び料理界に復帰。さらに、食材の鮮度の違い、味の良し悪しを目で判断する才能を持っている。常人では扱うことが出来ないであろう刃渡

り400mmを越える鮭切り包丁を使用する。サポートに土門樹里<sup>どもんき</sup>子、土門海の一人娘で小学生。北海道出身。エディブルガーディア  
ンNo.1のサポートを務めるだけあって、歳の割りに料理の腕前  
は異常な幼き天才。巧みな包丁捌きとパフォーマンスは派手。土門  
の30%の力に相当するらしい。小柄なためか、単純に父がでかす  
ぎるためか、土門海の肩に乗って移動する姿はかなり異様な光景。  
正直なため不味いものは不味いと言ってしまいう上、父親の料理以外  
を滅多に褒めない。誕生日は6月22日8歳、身長121cm  
、スリーサイズB58/W53/H61、血液型A型。

「よろしくお願いします」

「良かるう」

「任せて」

二人に説明すると、快く了解してくれた。それに、樹里子ちゃんと  
はほぼ同い年だから仲良くなれそう。

「それじゃ、こっちに部屋を用意してるから……………」

「いや、部屋は後でいい。それより、今から作るから厨房に頼む」

「はい。こっちに來てください」

「ああ」

「宇宙戦艦なんてはじめて……………」

そりゃそうだよな。

厨房に案内したら、二人は料理に入った。

「次は医者……………」

医者はナノマシンを使つたケガの治療を得意とする、不思議な雰囲気を持つ少女。人形のように整つた顔立ちと、緑色の豊かにカールした髪が特徴。寡黙で冷静な性格のために感情を表すことは滅多にない。この理由は感情をコントロールしないとナノマシンの制御に支障が出るため。そのため、感情をナノマシンが代わりに表してくれる場面もある。ある種の聖職者のような価値観を身に付けており、趣味は聖典を読むこと。だが、時折歳相応の行動をする事がある。ナノマシンを自分の体に貼り付けて顔や衣装を変えて、誰かに成りすましたこともある。なお、星座は第1みずがめ座。

そう、医者はギャラクシーエンジェルよりヴァニラ・Hだ。アッシュ当然、ハーベスターは格納庫に召喚した。

「……………ここは……………どこ？」

「ここは別世界。そして、ナデシコンと言う戦艦の中」

「別世界……………」

やっぱり、普通は悩むよね。

「船医になって欲しいけどいい？ 今は誰もいないから……………」

「……………分かりました……………未熟な私でよろしければ……………」



「よろしくお願いします」

これで、新しい仲間が出来ました。なので、今日は土門さんに頼んで豪勢にしてみました。

S i d e O u t

## 料理人と医者（後書き）

料理人で悩んだ結果、こうなりました。ガロード君達はぱっと終わらせました。

## テラフォーミング

火星に付いた私達は、遺跡跡に行ってみた。そこには激しい戦いの跡があり、完全な更地となっていた。

「アーニヤ、やり過ぎ……………」

「私は悪く無い……………」

戦いはかなり激しかったみたいで、MSなどの残骸も多数あった。

「まあまりサイクルとテラフォーミングを開始しよう」

先ず始めにMSなどでジャンクを回収して空地を作りました。

二週間かかり、回収と撤去が終わると、召喚ポイントを多数使ってドームを召喚した。もちろん、ニュータイプの意識は解放してある。

常備兵力はGビット五千機、生産ラインもあるし、ニュータイプの変わりに人工知能……………アリスを作りだし、管理者としたので防衛は平気だ。

更に食料プラントも増設しておいた。

生贄はプルトニウムのエネルギーなので問題無い。

「酸素があるって素晴らしいな」

「だな。あつ、俺とティファで案内するよ」

「お願い」

ここの防衛に保険として、デュオとガロードもいるから問題は無いはず。つまり、警察の役割を押し付けた。

「マスター、捕虜と子供達を解放するよ？」

「お願い」

ここに捕虜の人には住んでもらう。捕虜の人達の家族は希望したらこちらに呼び寄せることになる。

子供達はここなら、自由に過ごせるから、大丈夫だと思う。助けた私達には懷いてくれているから、子供達にはイーブレインをプレゼントしなきゃ。というか、普通に考えてもイーブレインないとテラフォーミングなんて出来ない。これからもつと大変だから頑張らないと。

更に三週間が立ち、ドームの一部私設を地下に移し、変わりに居住区や商業区を地上に作った。それに伴い、ドームの拡張も行った。

「カナデお姉ちゃん、ステラも自分の機体が欲しい……………」

火星テラフォーミングの作業が少し落ち着いたので、久しぶり……………始めて自宅でゆっくりしている所にステラがこんな事を言っ

きた。

「ダブルエックス……」

テーブルに突っ伏しながら、答えてみた。

「あれはステラには合わない」

確かにそうだけど、私はかなり忙しいの。

「なんでいきなり？」

「だって、ルリとフェルトにはナデシCONが有るし、デュオにはヘル、ガロードにはダブルエックスがあるのに、私には無い………入ったばかりのヴァニラだって持ってるのに………」

「諦めて作ってあげたらいい。後、どいて」

修行がわりに我が家に住んでいる樹里子<sup>きじこ</sup>ちゃんが、料理を沢山持つて来てくれた。

「受け取るね」

「うん」

「お願い」

三人で数々の料理をテーブルに運んでいく。

「ステラ、ルリとフェルトを呼んできて」

「二人はお仕事だよ?」

「あつ、言つて無かつた?」

「聴いて無いけど、お弁当にするから平気。ヴァニラはお弁当って聞いてたから」

一瞬、樹里子ちゃんが怖かつたけど気にしない。

「いただきます」

「召し上げ」

並んでいるのは、美味しそうな大トロのトロカツ…………南部ソース。

「サクサクのトロトロ」

「うん、溶けるようで美味しいね」

「味は問題無いしと……………食材が知らないのが多いから大変だけど楽しいしいいかな。次はフグの焼霜造り」

今度はお刺身。

「美味しい。厚くて歯ごたえもしっかりしているし、腕いい」

「ありがとう。でも、親父には届いていないから、もっと頑張る」

「「お願い」」

ステラと一緒に美味しい料理を食べる為に頭を下げた。

「うん」

それから、少しして食べ終えたので、私達はまったり食後のお茶を楽しんでいる。樹里子ちゃんはお弁当を用意したり、洗いものをしたりしていた。

「ふう、それでステラの機体だけど私も乗れる？」

「乗りたいんだ……………」

「お願い……………」

希望に満ちた瞳を上目遣いで見つめて来た。樹里子ちゃんも美味しそうデザートを持って来た。

「いい？」

白玉団子、胡麻団子……………美味しそう。

「……………」

「……………」

しばらく見詰め合った後、美味しい団子を食べさせて貰いました。

お弁当を渡した後、格納庫で作業を行う。

「ステラと樹里子ちゃんの機体…………ステラはエピオンとブラックサレナで作ろう。樹里子ちゃんは待って貰おう…………いや、ダブルエックスを渡して…………シュミレーターも用意して渡そう」

さて、開発しよう。

「ん、エピオンはコクピット以外なら殆ど丸々いける。ブラックサレナもそうだけど…………コクピットは一から作らなきゃ」

基本はエピオンにブラックサレナのスラスターなどを取り付けて、超高機動タイプにする。

「Gキャンセラーに変形システム、ドラグーンソード…………それに、装甲はダブルエックスのリフレクターを採用してビームを吸収……………反射させたい」

研究、開発、テラフォーミング……………頑張ろう。

四ヶ月後、火星の大地に生活基盤……………娯楽私設（映画館、遊園地、公園、カジノなど）も作れた。

「ふう、ガンダムランドグリース完成」

ガンダムランドグリース



G u n d a m   R a n d g r i d

型式番号：C N D - 1 M S

頭頂高：2 0 . 5 m

重量：1 4 . 5 t

装甲：ガンダニューム、フェイズシフト、リフレクター

武装

ビームソード×2

ブレイククロー×2

ソードリフレクター

ワイヤースラッシャー×2

システム

ゼロシステム

ボソソジャンプシステム

デイストーションフィールド発生装置

変形システム

相転移換装システム

ソードリフレクターシステム

自己再生システム

自己生成システム

エナジーウィングシステム

G キャンセラー

ニュートロジャマーキャンセラー

空間制御システム

搭乗者：ステラ・ルーシエ

動力は相転移エンジン二其、核パルスエンジン四其、ランドスปีナ高機走駆動輪二其を搭載。核パルスエンジンは足の内部に一基つつ搭載してある。更にパージ出来るブースターユニットとして残り二其の核パルスエンジンランドスปีナを搭載。

ランドスปีナ高機走駆動輪は片手に一基つつ入れて、相転移エンジンは胴部の内

部に搭載した。

「出力がおかしくなってるけど……………小型化には成功してるから平気……………多分」

ソードリフレクターは刃型ビットであり、普段は装甲としてビームを弾いて反射してくれる。

ブレイククローは爪で相手を止めて、掌から高周波振動破壊を放つ破壊の力。言ってしまうえば紅蓮の手に付いているアレです。

ワイヤースラッシャーは光糸を放ち、相手を止めたり、切り裂いたり出来る。

相転移換装システムは生成システムで別空間で作成したパーツや用意しておいたパーツを瞬時に換装する事ができるシステム。

エナジーウィングは言ってしまうえば光りの翼。

「姿は真っ黒な朱雀みたいになった」

エピオンやサイバスターの飛行形態に近い感じ。

「さて、ステラにデータを渡して試して貰おう」

後は、私の機体も用意しなきゃ。

## テラフォーミング（後書き）

これからSAOを書くので書く速度が落ちます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3078z/>

---

カナデちゃんとヤミちゃんが機動戦士ガンダムSEEDで暴れるよ～！

2012年1月5日23時48分発行